

非核平和都市品川宣言

2017 品川区平和使節

# 派遣レポート



品

品川区

## 非核平和都市品川宣言

今、この地球に、  
人類は自らを滅ぼして余りある核兵器を蓄えた。  
いまだかつて、開発された兵器で使われなかったものはない。  
これは、歴史の恐るべき証明である。

一刻も早く、核兵器をなくさなければならない。  
頭上に核の閃光がひらめく前に。  
遅すぎたとき、それを悔やむだけの未来すら、  
我われには残されていない。

品川区は、核兵器廃絶と恒久平和確立の悲願を込めて、  
ここに非核平和都市を宣言し、全世界に訴える。  
我われは、いかなる国であれ、いかなる理由であれ、  
核兵器の製造、配備、持込みを認めない。  
持てる国は、即時に核兵器を捨てよと。

このかけがえのない美しい地球と、  
そこに住む生きとし生けるものを、守り伝えるために。

昭和 60 年 3 月 26 日

品川区



「シンボルマーク」

## はじめに

品川区では、核兵器の廃絶と恒久平和の確立を願い、昭和 60 年 3 月 26 日に、区民の総意のもとに「非核平和都市品川宣言」を行いました。

この宣言の趣旨を一人でも多くの方々に理解していただき、戦争の悲惨さや平和の大切さについて一緒に考えていくため、品川区では様々な事業に取り組んでまいりました。

本紙における、広島・長崎への平和使節派遣事業は、宣言の趣旨を次世代に語り継いでいくことを目的として、昭和 62 年から実施していた「青少年広島の旅」を引き継ぎ、平成 15 年度から始めたものです。「品川区平和使節」と位置づけ、本年度で 15 回目を迎えました。

今回、広島へは品川区立中学校 8 年生 15 名、長崎へは一般公募の青少年 5 名を派遣いたしました。平和を願う呼びかけに、区民の方などからたくさんの千羽鶴が寄せられました。平和使節派遣生はそれぞれの鶴にこめられた「平和」への願いを胸に、区民の代表として広島・長崎へ献架いたしました。

特に広島の派遣生はそれぞれの学校の文化祭や学習発表会において、派遣生一人ひとりが知恵を振り絞り、友達や地域の方々に一生懸命平和への想いを伝えました。

この「派遣レポート」には、平和式典への参加、資料館の見学、被爆者講話の聴講、碑めぐりなどを通して、派遣生が感じ、学んだ貴重な経験が報告されています。今回の経験を通して、平和の尊さ、大切さに対する認識を深め、その「想い」が学校や職場、地域社会に広がり、あらためて平和について考えるきっかけになれば幸いです。

末筆ではありますが、本事業の実施にあたりご協力いただきました講師の柳川良子様、岸本 伸三様、広島市、長崎市、千羽鶴を託していただきました方々他、関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

平成 30 年 3 月

品川区

## 目次

はじめに	1
第1部 中学生広島平和使節派遣	
1. 行動日程表	3
2. 行動のスナップ	5
3. 感想文	8
4. 被爆者講話	21
5. 碑めぐり講話	36
6. 成果報告	38
第2部 青少年長崎平和使節派遣	
1. 行動日程表	47
2. 長崎での主な活動	
(1) 青少年ピースフォーラム開会行事（被爆体験講話）	50
(2) 被爆建造物等のフィールドワーク	51
(3) 平和祈念式典	52
(4) 平和学習（意見交換）	53
(5) 長崎原爆資料館見学	54
(6) 自主研修・市内見学	55
3. 成果報告書	57
4. 派遣をふり返って（感想）	63
第3部 資料編	
1. 広島	
(1) 広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式次第	65
(2) 平和宣言	67
(3) 平和への誓い	69
2. 長崎	
(1) 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典次第	70
(2) 長崎平和宣言	71
(3) 平和への誓い	73

# 第1部

## 中学生広島平和使節派遣



袋町小学校平和資料館にて（8月6日）

### ●派遣生

#### 【前列左より】

戸越台中学校	西沢 美槻
荏原第六中学校	境野 杏菜
荏原第五中学校	青柳 咲希
富士見台中学校	林 華子
日野学園	鈴木 杏梨

#### 【中列左より】

伊藤学園	菊島 唯
大崎中学校	工藤 真奈実
東海中学校	松村 京佳
豊葉の杜学園	堤 紗菜
八潮学園	山口 紗楽

#### 【後列左より】

荏原第一中学校	定村 拓実
荏原平塚学園	飯島 伸治
浜川中学校	谷内 壘
鈴ヶ森中学校	今井 涼介
品川学園	増田 なずな

### ●引率者

日野学園副校長	菊地 信江（後列右端）
豊葉の杜学園教諭	金城 和秀（中列左端）
総務部総務課	野口 武之

# 1. 行動日程表

## 第15回中学生広島平和使節派遣 平成29年8月5日～7日（2泊3日）

8月5日（土）

時 間	行 動 内 容	場 所
8:30	集合・出発式	JR品川駅新幹線北口
9:17	品川駅発（新幹線）・昼食	
13:08	広島駅着	
14:15～15:50	被爆体験者講話	広島YMCA国際文化センター
16:00～17:20	原爆ドーム・平和記念公園 見学等	平和記念公園
17:30～18:40	夕食・打ち合わせ	レストラン「リバーズガーデン」
19:10	ホテル着・一日のまとめ	広島ワシントンホテル
22:00	就寝	

8月6日（日）

時 間	行 動 内 容	場 所
6:30	集合・朝食	広島ワシントンホテル
7:20	式典会場到着	平和記念公園
8:00～9:00	平和記念式典参列	平和記念公園
9:30～12:00	意見交換会	広島YMCA国際文化センター
12:10～13:10	昼食	「お好み村」
13:20～14:10	袋町小学校平和資料館見学	袋町小学校
14:30～15:50	広島平和記念資料館見学	平和記念公園内
15:55～16:20	原爆死没者追悼平和祈念館見学	平和記念公園内
16:20～18:15	碑めぐり講話	平和記念公園
18:15	灯ろう流し	元安川
18:30～19:45	夕食	レストラン「リバーズガーデン」
19:55～20:15	灯ろう流し 見学	元安川
20:30	ホテル着・一日のまとめ	広島ワシントンホテル
22:00	就寝	

8月7日（月）

時 間	行 動 内 容	場 所
8:00	集合・朝食	広島ワシントンホテル
10:00	ホテルチェックアウト	
10:25	広島駅到着	
13:13	広島駅発（新幹線）・昼食	
17:06	品川駅着・解散式	
17:25	解散	JR品川駅新幹線北口

※台風5号の影響により、当初8月7日に実施予定の内容を8月6日に変更

## ◎事前学習会・事後報告会について

### 第1回事前学習会 6月16日（金）

派遣生が派遣の目的を理解し、より高い意識をもって、派遣に臨めるよう事前学習会を開催しました。

- (1) 派遣生自己紹介
- (2) 非核平和都市品川宣言事業について
- (3) 広島平和使節派遣事業について
- (4) 広島・原爆について学習
- (5) 事前学習課題について
- (6) 派遣日程や生活面・健康管理について



### 第2回事前学習会 7月19日（水）

各グループが第1回目の事前学習会で決めたテーマ「原爆投下後の被爆者の方と私たち」「原爆の今と昔」「原子爆弾について」の内容をグループ内で発表、意見交換を行いました。その内容を各グループでまとめ、全体へ発表しました。最後にスケジュールと注意事項を確認しました。

- (1) グループ学習
- (2) 「派遣のしおり」内容確認
- (3) 派遣の諸注意事項について



### 事後報告会 8月22日（火）

一人一人が広島で学んだこと、感じたことなど感想を発表しました。その後、今回の経験を同年代に伝えていくため、各中学校における派遣成果発表について確認しました。

- (1) 派遣の感想発表
- (2) 広島派遣の写真配布
- (3) 各学校における成果発表について



## 2. 行動のスナップ



品川駅で出発式 8月5日



被爆者講話 8月5日



爆心地（島病院）訪問 8月5日



原爆の子の像 見学 8月5日



区の代表として千羽鶴を捧げる 8月5日



平和記念式典へ参列（黙とう） 8月6日



世界遺産「原爆ドーム」見学 8月6日



意見交換等（講話や式典参加を通じて感じたことをまとめる）8月6日



灯ろうを作成 8月6日



広島名物お好み焼き（お好み村で昼食）8月6日



袋町小学校平和資料館にて 8月6日



平和記念資料館にて① 8月6日



平和記念資料館にて② 8月6日



碑めぐり講話① 8月6日



碑めぐり講話② 8月6日



元安川で灯ろう流し見学 8月6日



帰りの広島駅にて 8月7日



品川駅にて解散式 8月7日

### 3. 感想文

#### 平和のバトン

東海中学校 松村 京佳

世界初の原子爆弾が投下されてから七十二年、私は平和使節として広島を訪れました。戦争や原爆のことを、実際に広島に行って学んでみたいと思ったからです。到着した広島はとてもきれいな街で、かつては地獄のような光景が広がっていたなんて、考えられませんでした。

一日目は、十六歳の時に被爆された、柳川良子さんからお話を伺いました。柳川さんのお話はとてもリアルで、原爆投下直後の悲惨な状況が伝わってきました。中には、思わず耳をふさぎたくなるようなつらく悲しい話もありました。何も悪くない人が、こんなにつらい思いをさせられるなんて、原爆は本当に残酷だと強く感じました。そして、思い出したくないような記憶を、私たちに語ってくださった柳川さんに、感謝しなければならぬと思いました。

二日目は、平和記念式典に参加するというとても貴重な体験をしました。会場には外国の方も多く、平和について考えている人はたくさんいることを実感しました。黙祷を捧げたとき、平和を願う人の思いが一つになった気がしました。そして、平和を願う人が式典などをきっかけに一人でも増えてほしいと思いました。

平和記念資料館などでは、被害の大きさを目で見て実感しました。ぐにゃぐにゃに溶けたガラスや、破れた服が、どれほどの熱や風にさらされたかと思うと、とても恐ろしかったです。また、原爆で出た多量の放射線は、直後だけでなく長期にわたって体に被害を及ぼすことも分かり、今も苦しんでいる人が多くいることに驚きました。原爆は、多くの人を殺しただけでなく、生き残った人

のその後の人生までも変えてしまうことを、知ってもらいたいと思いました。

今回の派遣で、私は今の日々がどれだけありがたいかを知りました。学校で勉強したり、遊んだりすることは、平和だからできることなのです。まず、戦争の怖さや残酷さを知って、平和の尊さを多くの人に分かってほしいです。そして、戦争を二度としてはいけないのはなぜなのか、何が起きていたのかをきちんと理解し、再び戦争が起こったらどうなるかを考えてほしいです。難しいことかもしれませんが、平和を守るためにはとても大切な事だと私は考えています。

「今の平和は、多くの人を踏み台にしてできた」と、柳川さんはおっしゃいました。多くの亡くなった方や平和に向けて復興しようと尽力した方々のおかげで、今があります。そうしてつないできた平和のバトンを、次の世代へつなげるのは、私達です。戦争を絶対に忘れず、平和を守りたいと思う人が増えれば、きっとバトンは受け継がれてゆくと考えています。

#### 後へ続く者の行動力への希望

大崎中学校 工藤 真奈実

「Ordinary people understand this, I think. They do not want more war. They would rather that the wonders of science be focused on improving life and not eliminating it.」

8月6日、私は、広島平和記念式典に参列しました。式典には、アメリカを始めとする80の国の人々が参列したとされています。戦後72年という節目を迎えた今、多くの人々が式典に参列し、原爆について関心を抱いています。それ程、今では世界に名を轟かす大きな出来事として、歴史に刻まれている事を感じさせられました。

今から72年前の1945年8月6日、広島は一

瞬にして焼け野原と化しました。今では想像もつかない、むごく、残酷な被害に見舞われ、人々は心も体力も感情までも奪われました。講話をして頂いた、柳川良子さんは高校一年生という若さで原爆被害に遭われました。太陽が真っ二つになるような大きな音と共に、校舎が激しく崩れ落ちたそうです。あたりの被害が深刻化すると同時に、自身の体にも徐々に異変が起こりました。頬は切れ爛れ、左手の三本の指はバラバラにぶら下がる。又、今でも当時突き刺さったガラス片が体内に残っているそうです。聴いているだけで心が痛くなるリアルな言葉が印象的でした。周囲を歩き進めば死体の山。中には立ったままの死体も。そんな生死の狭間に立つ、地獄のような被害と共に歩んでこられた被害者の方々を思うと、当時の壮絶で過酷な日々が目に浮かんできました。

平和記念資料館には、原子爆弾の一種であるファットマンやリトルボーイの模型の展示がありました。それらは大人の約10倍近くの大きさで、驚異の威力を発揮しました。500~600メートルの爆風、3000~4000度の熱線、19トンの力で押し潰す威力、未知なる力を秘める原爆が、広島の当たり前の日常、平和な日々をみるみる壊していきました。人々の全てを奪っていった原爆は本当に恐ろしく、想像を絶するもので、心苦しくなりました。

冒頭に述べた英語は、昨年5月27日にアメリカのオバマ前大統領が広島を訪問した際、核兵器廃絶を訴えたスピーチの一部です。「これ以上、私達は戦争を望んでいない。科学を人々を充実させることに使ってほしい。」オバマ前大統領は、一人の人間として核兵器廃絶の意見を世に発信しました。一人一人が絶対悪の核兵器や失うものだらけの戦争を無くす為に、行動で訴えています。私達中学生はどうでしょう。今ある平和で幸せな日々を当たり前とっていませんか。今があるのは、被爆者の方々の粘り強い平和への思いや復興を望んで懸命に尽くして下さった方々のお陰

です。次の世代を担うものとして、この決して遠くない過去を振り返り、平和を考えていくべきです。これまでの先達の方々が伝えて下さった平和を繋げていく義務があると思います。柳川さんを始めとする被爆者の方が、どんな思いでここまで生きてこられたか、日本人として考えて行くべきです。

私たちには何ができるでしょう。これからの日本を背負う者として、自分が平和に対してできること。これを今、何不自由なく暮らせる土台を与えて下さった方々への恩返しだと思い、一人一人が平和な日本を繋げ続ける為にできることを行動を起こしてほしいです。

---

## 自覚の芽生え

浜川中学校 谷内 壘

七十二年前の八月六日、広島の上に放たれたたった一発の爆弾によって広島は地獄と化し、人々は辛く悲しい思いをしました。しかし、このような事実を詳しく知ることができるのは、僕たちが最後になるかもしれません。そこで、自分がこの事実を知り、伝えていくという自覚を持って、この広島派遣に臨みました。

一日目。柳川さんによる被爆者講話を聴きました。それは僕の想像を遥かに超えるものでした。当時十六才だった柳川さんが建物内にいた時、一瞬の閃光と同時に、強烈な爆風が人々を襲いました。かろうじて建物から脱出した柳川さんが目の当たりにしたのは、皮膚の垂れ下がった人々。僕には全く想像もつきませんでした。また、瀕死の状態の人を助けられず見て見ぬふりをしたという話を聞いて、当時の人々は生きるのが精一杯で、まさに地獄だったということがよく分かりました。また原爆の悲惨さだけでなく、今の日本の平和と繁栄は、このような犠牲の上に築かれたということも教えてもらいました。今の我々が恵まれ

ているということを実感して生きていこうと思えました。

二日目。平和式典では、たくさんの外国人の方が参列していたので、日本以外の国もこの式典に注目しているのだと思いました。平和記念資料館では、被爆することによってどのような健康被害を被るのかや、被爆前後の広島市の様子を知ることができました。ここで原爆は普通の爆弾と違い、人を長く苦しめる、あってはならない兵器だということを改めて感じました。続いて訪れた袋町小学校では、伝言文字が記載されている壁が目に残りました。僕は最初、この壁に名前が書いてあり、親はこれを頼りにして必死に自分の子を探していたのだと思いました。しかし、親の気持ちになって考えてみると、親は現実には決して見てはもらえないだろうと思いつつ書いてきたら、複雑な気持ちになりました。

僕は原爆のみがあつてはならないものというわけではなく、苦しみや悲しみしか残さない戦争こそがあつてはならないものだと思います。

この派遣で学んだことは、一生に一度しか経験することのないようなものです。八月五日、六日、七日、この三日間で学んだことを学校で全生徒に伝えます。



## 広島について

鈴ヶ森中学校 今井 涼介

僕は今回の広島平和使節派遣で、戦争の悲惨さと平和の大切さを知ることができました。

一日目、僕たちは被爆者の方のお話を伺いました。手や顔の皮膚が垂れ、おばけの様な人たちがうろろと歩いていたというお話は、本などで読むよりも生々しいものでした。被爆者の方は、山積みになった死体を何度も見たと仰っていました。しかし、それらを見ても何も感じなくなっていたそうです。戦争というのは、人の命だけでな

く、心まで奪ってしまう恐ろしいものかと思いました。

二日目には、平和記念式典に参列しました。たくさんの人が参列していて、中には外国の方々もたくさんいました。世界中のたくさんの方々が平和について関心を持っているのだと思うと、少し嬉しくなりました。そして、この原子爆弾の問題が、日本だけでなく世界全体の問題になっていることに少しほっとしました。

三日目には平和記念資料館を見学しました。全身にやけどを負った人や、体中からうじ虫が出ている人の写真が掲示されていて、とても心が痛みました。また、資料館には今の原爆ドームの被爆前の模型がありました。それはとても立派な建物でした。そのような建物が、あんなにも破壊されている様子を見て、原子力爆弾の威力が分かりました。

僕は、この派遣に参加する前まで原爆投下について、あまり興味を持っていませんでした。まして、平和のありがたさについては考えもしませんでした。しかし、この派遣を通して考え方が変わりました。被爆者の方の話や、平和記念式典での小学生のスピーチなど、刺激を受けるものがたくさんありました。その中でも、被爆者の方の言葉に感銘を受けました。それは、「たくさんの犠牲を踏み台にして、やっと今の日本の平和がある。」という言葉です。今ある平和は、決して当たり前なことではなくて、あの日亡くなった方々のおかげでもあるのだと気づかされました。

今の日本は平和だと思います。ですが、世界には紛争が絶えない国や、テロが多発する国があり、日本ほど平和な国は少ないと思います。僕は、日本だけが平和であっても、それは本当の意味での平和とは言えないと思います。世界中が平和であり続けることが、本当の平和だと思うからです。では、本当の平和を実現するために、僕たちができることは何でしょうか。それは、今回の平和使節派遣で学んだことを多くの人たちに伝えていく

ことです。実際に聞いたり見たりしないと分からないこと、実際に行き行って感じたことを、文化祭などの場で伝えていきます。全てを伝えることは難しくても、平和について少しでも考えてもらえるきっかけになればいいと思います。



## 二度と繰り返さない

富士見台中学校 林 華子

平成二十九年八月六日八時、例年通り広島で平和の象徴である平和記念式典が開かれました。

七月に国連で「核兵器禁止条約」が採択されたことを受け、式辞や平和宣言でもその話題が取り上げられました。唯一の被爆国である日本はこの核禁止条約に賛同しませんでした。核保有国と非核保有国の対立がより深まるというのが理由です。安倍総理はこれに対して「究極の状況で核を使用するという選択肢はもってのほか。絶対に、いかなる場合でも核兵器は使用しない。」と宣言していました。「核を使ってもよい。」そんな思想を持つ人がこの世界にいる限り、核兵器が世界から消えることはないと思います。そんな負の歴史を繰り返しては絶対に駄目だと私は思います。七十二年前、原子爆弾は広島の人々からありとあらゆる幸せを奪い取っていきました。私はそのような人たちの姿を、絶対に見たくないし、経験したくありません。

時が経ち、会場の時計が八時十五分を指しました。その瞬間から、辺りは一段と静まりかえりました。それぞれが神妙な面持ちで、黙とうをします。目を閉じ静かに鐘が鳴り響くと、その瞬間から、足元が揺らぐような感覚に襲われました。今から七十二年前の悲痛な叫びが聞こえたような気がしました。七十二年前の今、この瞬間に私と同じくらいの子供たちが次々と亡くなっていったと思うと、いたたまれない気持ちになりました。当時のことを考えると、本当に私たちは幸せな時代

に生まれてきたんだな、と感謝の気持ちでいっぱいになりました。その時、私は原子爆弾で命を落とされた方々、そして未来の子供たちのためにも、核兵器、原子爆弾は絶対に使用してはいけない。それを、正しい知識で学び、多くの人たちにも関心をもってもらいたいです。七十二年経っても、あの日の傷が消えるわけではありません。失った大切な人が帰ってくるわけでもありません。だからこそ、戦争がいかに悲惨なものなのかを伝える、広めることが大切なのだと思います。

もうすぐ戦争によって原子爆弾を体験した人の平均年齢が八十一歳を超えます。戦争を経験した方々がいなくなってしまうのです。だから今回の広島平和使節派遣を通して、今度は私たち自身が、少しでも多くこの悲しい出来事を広めなければならない、と感じました。未来を生きる人たちにこの歴史を繋ぐバトンを渡す努力をすることが、平和をつなぐことにきっと繋がるでしょう。私は今回の経験を一生忘れません。



## 広島平和使節派遣で学んだこと

荏原第一中学校 定村 拓実

僕は今回の広島平和使節派遣で、原爆の恐ろしさや命の大切さを学びました。

僕は今回の広島平和使節派遣の中で特に3つの体験が心に残っています。

1つ目は被爆者講話です。取材時89歳、被爆当時16歳だった柳川さんという方でした。僕は柳川さんから次のようなことを聴きました。

「当時わたしは16歳でした。しかし、勉強はろくにできませんでした。そして、勉強の代わりに軍隊のための仕事をしていました。そんなある日、飛行機が飛んでくる音がきこえてきました。その飛行機がB-29というアメリカ機とはすぐに分かりましたが、まさかその飛行機が原爆を落とすに来たとは知る由もありませんでした。その他に

考える間もなく自分は気絶していました。その理由は2つあります。1つ目は原爆の有害物質に一瞬で体を壊されたからです。2つ目は原爆の爆風によって崩れ落ちた建物が自分に落ちてきたからです。そして、目が覚めたとき、自分の上には高くがれきが積み上がっていて、ほぼ真っ暗でした。でも、そんな中、上の方に一筋の光が見えました。その光の外から先生の声が聞こえてきたのです。

「中村、大丈夫か!!?」

中村とは柳川さんの旧姓です。自分を探している先生がいる……。だから頑張るって上の上をろうと思いました。右腕は動きませんでした、左腕は動いたので左腕を使って光まで進み、闇から抜け出すことができました。」

この話の、がれきの山に埋められて身動きが取れない中、命の為に尽くす姿に僕は胸を打たれました。

2つ目は、平和記念資料館に行ってきたことです。ここでは原爆の恐ろしさを色々な視点から捉え、様々な資料を使って伝えています。例えば、原爆の熱風により、背中のだれた女性の写真や、戦争の悲惨さを訴える詩やアメリカ軍撮影のキノコ雲の写真があります。また、元々の姿のガラス瓶と原爆の爆風の風圧で押しつぶされたガラス瓶が並べられていました。他にも、1階には原爆投下からの日数と、北朝鮮最後の核実験からの秒数を指している時計が置いてありました。多くの形で戦争の非道さと平和のありがたみを感じました。

3つ目は碑めぐり講話です。碑とは、亡くなった人々を弔う為に作られたお墓です。その中に滑走路作りをしていて被爆死した小中学生の碑があります。彼らは僕が学校に登校するのと同じように登校し、今でいう授業中に死んでしまいました。ぼくは、真面目に登校して死んでしまう時代でなく真面目に登校して得をする時代に生まれてきて幸せだと思います。

しかし、僕がこのように幸せに生きていくこと

のできる時代を創ってくれた先人たちの汗のにじむような努力を忘れてはいけません。ぼくはこの平和のありがたみを感じながら日々、生活していると思います。

---

## 広島平和派遣に参加して

荏原第五中学校 青柳 咲希

私は今回の派遣で、「どうして今の平和な日本があるのか」「これからも平和を実現するために何ができるのか」ということを考えさせられる貴重な体験をすることができました。

派遣1日目。広島町の町に出て最初に感じたのは、こんな都会に、本当に原爆が落とされたのだろうかということ。七十二年前に原爆が落とされ、四〇〇〇～五〇〇〇度にもなった広島町には、現在、路面電車が走っており、どこを見てもたくさんの人がいてとても活気にあふれていたからです。

被爆者の方の講話では、十六歳の頃に戦争を経験した柳川さんに当時の事を伺うことができました。柳川さんはとても熱心に当時の事を教えてください、戦争を経験していない私達でも戦時中の事を想像することができました。たった一発の原爆で一瞬にして建物がバラバラになり、何の罪もない人が亡くなっていく中で生き残った人達の気持ちを考えると悲しい気持ちでいっぱいになりました。でも、生き残った人達の想いや、多くの人達の命が奪われたことを私達は決して忘れてはいけないと思います。私はこの講話で柳川さんが最後に言っていた次の言葉を多くの人達に広めたいです。

「戦争で亡くなった、たくさんの犠牲者を踏み台にして今の日本ができていることを忘れてはいけない。」

この言葉を聞いて、私は今の生活が当たり前ではないんだと感ずることができました。だからこ

そ、今の日本があることを当り前に思わないで、これから一日一日を大切に生活していきたいです。

派遣二日目の八月六日。この日は広島平和記念式典に参列しました。式典は静寂の空気の中始められ、最初に原爆死没者名簿奉納が行われました。私が式典に参列して驚いたのは海外の方の多さです。参列する人のほとんどが日本人だと思っていたけれど海外の方も多くいて広島で起こった出来事について、世界中の人達が関心をもっているのだと実感しました。また、広島市長や子ども代表の言葉からは、平和を願っている気持ちが伝わってきました。

資料館では、原爆ドームのレプリカを見ました。そのレプリカは原爆が落とされる前と後のレプリカです。前と後を見比べてみると、原爆の恐ろしさ、もの凄い破壊力を感じました。屋根や窓は、爆風や熱ですべて無くなり、ドームの下には原爆で破壊された壁がいろんなところに落ちていました。実際に見た時の迫力はすごいものでした。資料館で見た三輪車やボロボロになった洋服からは、原爆の悲惨さを生で感じることができました。

今回の派遣に参加してたくさんのことを学ぶことができました。実際に戦争を経験された方が減っていく中で今、私に何ができるかをしっかりと考え、戦争の悲惨さ、平和の大切さを忘れずに、多くの人達に伝え続けていきたいです。また、「平和」について世界中の人達がしっかりと考えていくことが、今回の派遣を通して重要なことだと思いました。



## 広島から平和を世界に

荏原第六中学校 境野 杏菜

1945年、8月6日午前8時15分原子爆弾が広島に投下されました。広島に住んでいた約35万人のうち約14万人、全体の40%の人が尊い

命を落としました。原子爆弾は一発で罪のない多くの人の家族を奪い、住居を焼き尽くし、感情までも奪ってしまう、言葉に表しきれないほど恐ろしいものです。

あれから72年経った今、広島を訪問しましたが本当に原子爆弾が落とされたのかと目を疑うほど、街がとても賑やかで平和記念公園の周辺は緑が豊かでした。今日、私たちは当たり前ですが当たり前でできます。毎日、学校へ通い、勉強をし、部活動をし、友達とたわいもない話で笑い、家では家族と食卓を囲んで過ごせる毎日です。しかし、72年前、人々は「明日は生きていだろうか。」とほんの少し先の未来を考えるのもやっとだったのです。

派遣一日目の被爆者講話で、柳川さん自身は原子爆弾が落とされた直後、建物の下敷きになり、声をあげてなんとか助けてもらったけど自分の体を見ると爆風によって頬と腕の皮膚が垂れ下がり、頭と首にはガラスが刺さり血だらけになったと聞き、耳を塞ぎたくなるくらい恐ろしい話で心が痛くなりました。でも、これは現実起きたことで、私たちはこの話に耳を塞いではいけないのです。思い出すのも辛いであろうこの話を私たちにしてくださった思いに応えなくてはと思いました。講話の最後に「この出来事は二度と忘れてはいけない、そのために次の世代にもこの話や自分が考えたり思ったりしたことを伝えていってほしい。」とおっしゃいました。私にはその使命があるのだと再認識しました。日本に限らずアメリカや他の国でも戦争経験者が減ってきています。戦争を経験したことがない人が多いことは平和に近づいてきているという面では良いことですが、逆の見方をすると戦争については知らなかったり、関心が薄れてきたりしているということでもあります。私はそこに危機感を覚えています。今、北朝鮮のミサイルや核実験の問題が世界全体で深刻な問題となっていて、またいつ戦争が起きてもおかしくない状態に陥っています。私はその恐ろし

さや悲惨さを広島で学ぶことができました。柳川さんをはじめ、沢山の戦争を経験した方のためにも再び同じ過ちを繰り返さぬよう今を大切に生きていかななくてはならないと強く思いました。

派遣二日目は平和記念式典に参列し、戦死した方の冥福を祈るとともに核兵器について、平和について考える場となりました。今年の7月に国際連合で核兵器禁止条約が採択され、122か国で賛同されましたがまだアメリカ合衆国やロシア連邦、中華人民共和国、イギリス、フランスは核兵器を所有しているので廃絶には長い時間がかかります。核兵器とは何か、核兵器によってどんな被害が起きるのかをもっと世界全体でじっくり考えていく必要があるのではないかと思います。

また、式典に多くの外国人や外国から来たメディアも参列していました。原爆の問題は日本だけの問題ではありません。広島を訪れた外国の方にも伝えていってほしいと思います。世界中の人が原爆のことを知り、共に考え、過去の過ちを繰り返さないこと、これが平和を守っていくために大切なことなのではないでしょうか。武器や兵器に頼らず、ましてや広島にあの惨劇を生んだ核兵器などは用いず、話し合いを重ね、誰もが意見を尊重し合うことが大切だと思います。そして平和な世界をつくるため、「もう二度と戦争をしない、してはいけない」という強い気持ちを世界中の人が心に刻むことができれば「世界平和」が実現できるのだと思います。

今回、貴重な体験をさせていただいたことに心より感謝します。今回学んだことをみんなの心に届くように責任をもって伝え、次の世代、永遠に平和を繋げていきたいです。

---

## 伝えてほしい「平和」を

戸越台中学校 西沢 美槻  
広島。かつて原爆が落とされた地。私はこの派

遣で、原爆投下時の広島状況と72年たった今の現状を知る、という目標をたてました。ですが、いざ市内に到着してみると、ごく普通の都会の景気が見えて想像との違いに驚きました。しかし、その後、平和記念公園に行ってみると、戦争や原爆の悲惨さを感じました。原爆ドームです。原爆が投下された1945年8月6日。あの日からずっと変わらない姿の下には、草が生え、周りにはビルが建っているその風景は歴史の長さを感じさせました。他にも、公園内には様々な碑や像があり、原爆の威力の激しさを痛感しました。様々な体験をしたこの派遣。私は特に印象に残ったことが2つあります。1つ目は、被爆者講話です。お話を伺ったのは、16歳の時に被爆した柳川良子さん。当時は女学校4年生、軍事工場で働いていたそうです。今の私とあまり変わらない年齢で被爆した柳川さん。辛かっただろうなと思いました。柳川さんはありのままに、自分に起きた全てのことを話してくださいました。当時の状況、原爆が落とされたときの心情、家族、先生が亡くなってしまったこと……そのリアリティあるお話は、柳川さんの苦しさ、悲しさ、寂しさ、怒りなど、様々な感情が込められていました。特に、「たくさんの犠牲になった人たちを踏み台にして今日の平和がある」という柳川さんの言葉が印象的でした。私達若者は、犠牲になった方々の思いを受け取って、それを伝えていかねばならない、その義務を強く感じました。

2つ目は、8月6日の平和記念式典です。出席して思ったことは、外国の方が多くことです。世界の人々の、平和への熱い思いが感じられて、日本人として嬉しかったです。

8時15分ちょうどに行った1分間の黙とう。何百人もの人が集まる中、唯一聞こえるのはセミの声。目を閉じれば、72年前の広島の無残な光景が蘇るような、独特の雰囲気は漂っていました。

この派遣を通して、私は改めて平和の大切さを感じました。ありきたりなことかもしれませんが、

全世界の人々が平和を望むことはとても難しいと思います。けれども、この広島平和式典のように、何百人の人が平和を祈っていること、それこそ「平和」だと私は考えます。だから、いつかは、世界中の人が平和を望めるようになってほしいです。そのために、私達ができること。それは、平和を願うこと。細かく言えば、平和を願うことを続かせる、つまり次の世代にも平和の気持ちを伝えることです。私は平和使節として、平和について周りの人に伝えます。微力ですが、このようなことでも「平和」に続いてほしいとこの派遣を通して実感しました。



## 平和のバトンをつなぐために 今できること

日野学園 鈴木 杏梨

今、世の中は混沌とし始め、無差別テロが世界中で多発したり、北朝鮮がミサイル実験を行ったりと、シリアで化学兵器を使用した攻撃が行われたりと、平和を乱すようなニュースが多々見受けられます。そんな中私は、日本は今まで通り武力を持たずに自国を守ることが出来るのだろうかと考えようになりました。

その頃、私は品川区の広島平和使節派遣という活動に参加することになりました。二泊三日の活動では平和記念式典に参列し、平和記念資料館を訪れ、被爆された方々のお話を聞かせて頂きました。どの資料もお話も私にとっては衝撃的な内容であり、戦争の悲惨さを物語っていました。私は、この活動を通し戦争の恐ろしさを改めて実感したのと同時に、世界の人々と共に平和な日々を過ごすために、一人の日本人として、私達はこれから何ができるのか、何をすべきなのかを考えるようになりました。

終戦直後、戦争の惨禍から日本は必死に立ち上がりました。大都市は焼き尽くされ、多くの国民

を失い、飢えや貧しさを必死でしのぎ、敗戦国として絶望的な環境の中、私たちの先人達が未来に希望を持ち続け、努力を惜みず、一生懸命に働き続けたからこそ、今の私たちの平和で自由な生活があるということ私達は広島派遣を通して学びました。現代の日本に生まれ育ち、平和と自由が当然のように与えられてきた私達の多くは、この平和な環境で育つことがいかに特別で、いかに幸運な事であるのかを忘れがちです。世界には今でも紛争や内戦で十分に食料や水が得られなかったり、教育が受けられなかったりする子ども達が沢山います。それに加え、先進国の国々の動きもどんどん自国追求型に変わり始め、世界は今、あるべき世界の姿からどんどんとかけ離れつつあり、私はそれをととても怖く感じています。けれども、そんな時代だからこそ、日本は今、世界に「平和」を訴えなくてはならないのではないのでしょうか。世界で唯一の被爆経験国としてどん底を味わい、そこから見事に復活し、平和の象徴として世界から認められる国にまで発展を遂げた日本だからこそ、できることがあると私は思います。日本が世界へ訴える「平和」は300万人もの尊い命の犠牲の上に成り立ち、その訴えは他のどの国よりも重く、強い影響力があるのだと私は信じています。これ以上戦争や紛争で苦しむ人々が増えないように、私は一人の日本人として、約70年前に起きたあの恐ろしい出来事を絶対に繰り返さないためにも世界へ平和を訴えていきたいです。

先人達が積み上げ、築きあげた平和な日本を次の世代、またその次の世代へと受け継いでいけるよう、現代に生きる自分たちのすべき役割をしっかりと考え、いかなる戦争も認めず、戦争のための武力を放棄し、平和を訴えるべきだと今回の広島使節派遣を通して今、私は感じています。

---

## 当たり前の日々

伊藤学園 菊島 唯

1945年8月6日、原子爆弾により、広島は一瞬にして焼け野原となりました。原子爆弾が襲った広島は跡形もなく、そして、多くの罪なき命と幸せを奪い去っていきました。広島から当たり前の日常を奪ってから、72年の年月が経ち、私は今年広島を訪れました。最初に感じたことは、とても賑やかだったことです。72年前の姿はそこにはなく、街は自然に溢れ、人々は楽しそうに笑っていました。

被爆者である柳川良子さんにお話を伺うことができました。柳川さんがある人にこんな質問をされたそうです。「アメリカを憎みますか。」すると、柳川さんはこう答えたそうです。「いいえ。私は戦争を憎んでいます。」当時柳川さんが経験した全てが悲しく、そして悲惨で目をつぶりたくなるような現実ばかりだったと思いますが、その現実から目をそらさず、次の世代の人々に戦争の苦しさや悲惨さを訴え続けています。被爆者は、年々減ってきているそうです。被爆者のお話を聞いた私たちが、次の世代へと伝えていかなければならないと強く感じました。

私も参列した広島平和記念式典には、多くの人たちが参列していました。そこに、外国の方がとても多くいたことに驚きました。厳粛な空気の中、午前8時15分、私たちは黙とうを捧げました。平和記念公園に平和の鐘が響き渡りました。式典での二人の子ども代表の言葉が、私の心に深く残りました。

「原子爆弾が投下される前の広島には、美しい自然がありました。大好きな人の優しい笑顔、ぬくもりがありました。一緒に創るはずだった未来がありました。広島には、当たり前の日常があったのです。」

広島にあった当たり前の日常を奪い去った原子

爆弾を、二度とこの世界で使わせてはならないと思いました。

今回の経験を通し、私が今伝えたいこと。それは、「今の当たり前の世の中こそが、幸せと呼べる」ということです。人々がよく口にする言葉。「明日、何しようかな。」「明日、これをやろう。」「これをやるのは明日でいいや。」それは、確実に自分たちに「明日」があるから言える言葉です。72年前の日本に「明日」はあったのでしょうか。今を生きることに精いっぱいの人々に「明日」はあったのでしょうか。「自分は、明日生きているかもわからない」という状況の中で、きっと先にあると信じた希望を追って、生きていた人々が72年前にはいました。今、当たり前のように学校へ行き、家族とご飯を食べ、温かい布団で寝る。この当たり前の日常が、幸せであると噛みしめて生きている人々は、果たしてどれくらいいるのでしょうか。私たちが生きているこの世の中は、戦争で苦しんだ人たちが夢見た未来です。今の当たり前の世の中には、たくさんの幸せがあるということをお忘れず、生きていかなければならないと感じました。私はこのことを踏まえ、多くの人に72年前のことを伝えていきたいです。そして、今の世の中を幸せであると感じられる人が増えることを願っています。

---

## 平和のために

八潮学園 山口 紗楽

昭和二十年八月六日。この日付を口にしたとき、一体どれだけの人が「原爆」を連想するのだろうか。現在原爆投下の日付を覚えている人は非常に少なく、日本の約三割しかいないという。日本は唯一の被爆国であり、私たちが自国の歴史を知ることによって将来の日本のあり方を変えられることがあるのではないかと思い、この広島使節派遣に参加させていただいた。

広島に着き、最初に思ったことは本当にここに原爆が落ちたのかということだ。

「七十五年間草木も生えない」

と言われていた広島だが、今では路面電車も行き交う活気のある街へと成長していたことに、私自身驚きを隠すことができなかった。しかし、その後の被爆講話で講師の柳川さんが聞かせてくださったことは、現在の明るい広島の間からは想像もできないような悲惨な姿であった。

柳川さんは当時十六歳で、その日は学校にいた。会議をしているとき、B29の不快感がし、突然空を切るような閃光が走ったと思ったら、目の前の建物が倒れ、下敷きになってしまった。なんとか地上へ這い上がり、ふと自分の体を見ると、右手が胸の位置まで下がっていて、手はバラバラについていた。泣き叫ぶ声の中先生に助けをもらいながらも病院へ行くと、気が狂ったように走り回る人たちがいて、とても治療してもらえるような状態ではなかったと柳川さんは語った。私には到底想像することができない悲惨な状況であった。その後、柳川さんが友人と家に帰るために歩いていると、死体の山から手が伸びてきて、

「助けてくれや。水くれや。」

という声がした。しかし、自分たちは一滴の水も持っておらず、助け出してあげられるような体力も残っていなかったため、そのまま通り過ぎた。あの時、自分たちにはどうすることもできなかったとはいえ、一人の人間を見殺しにしたという事実に対しての罪悪感は今も消えないとおっしゃっている。もし、私が柳川さんと同じ立場であっても、同じ行動をとったと思う。さまざまな話の中で、一番印象に残っているのが、

「アメリカは憎まない。戦争を憎む」

という言葉である。地獄のような状況であったにも関わらず、柳川さんが人間性を失わずに今でもつらい過去を私たちに話してくださるのは、きっと戦争は絶対にしてはいけないという強い信念があるからだと思う。

私たちが今、すべきなのは、戦争について少しでも多くの人に伝えていくことである。世界では核爆弾の恐ろしさを忘れてしまっている人々がたくさんいる。もうすぐ、実体験を語るができる人もいなくなってしまうだろう。今回広島派遣に参加した私たちが七十二年前に起きた悲劇を風化させることなく、少しでも多くの人に伝えていかなければならないと思う。それが今回、参加させていただいた私の義務であり、二度と戦争を起こさせないために私たちができることなのだ。



## 広島～平和のバトンを繋ぐ～

荏原平塚学園 飯島 伸治

私は、今回広島平和使節派遣に参加するにあたって考えていたことがありました。それは、終戦から七十年以上たった今も核兵器を保有し核実験を繰り返している国がある現実を見てこの世界から核兵器をなくすことは無理なのではないかということです。

しかし、広島から帰ってきた今はその考えは「無くないかもではなく、無くしていなくてはいけないんだ」というように変わりました。そのきっかけとなったのは記念式典で聞いた国際連合の方の話の中で「核兵器をなくすのは難しい、でもなくさなければいけない。」との一言でした。続けて「そのやり方には、いくつかのパターンがある。その一つは、話し合うこと、対話が大切だ。」とっていました。国や人権、思想の違いを互いに認め理解しあって対話していくことが一番大切なんだと思いました。まずは、私自身が平和についてもっと深く考え、その考えや想いを自分なりの言葉で伝える。その繰り返しによって一人でも多く平和への理解者を増やしていく。単純で地味なのかもしれないが小さな行動の一つ一つが、戦争という壁を打ち破り平和というゴールへの道を切り開いて行くと思いました。

今回、私は副題に「平和のバトン」という言葉を入れました。この言葉を入れようと思ったきっかけは被爆者講話です。被爆者講話をしてくださった柳川さんの話は私たちが想像もできないほどのつらい経験で、本当なら忘れてしまいたいし思い出したくないはずです。そのつらさを乗り越えて私たちに戦争の惨劇や、原爆の恐ろしさを伝えてくださいました。話の最後に「今の平和はたくさん犠牲者が出たからこそ成り立っている。」と言っていました。その言葉を聞いて私は、何気なく過ごしてきた日々を振り返り、もっと平和で自由に生きることができることに感謝をし、一日一日を大切に全力で生きなければと思いました。戦争という凶器に何もかもを奪われても負けずに世の中を平和にしたいとの強い一念で必死で生きてこられた方々がいたからこそ今の平和がある。その尊い平和を永久に守り続けていかなければいけないと決意しました。

終戦から七十年以上経った今、原爆が広島、長崎に落とされたということがただの歴史の一つになっているように感じる場合があります。そして年月がたつごとにその事実が失われていく危機感を持ちました。私たちは、戦争を経験していません。だから戦争の恐ろしさを理解するのは難しいです。でも、これからの平和な世界を作り守っていくのは私たちです。私たちは今、平和のバトンを受け取らなければいけない。そのバトンを受け取った一人一人が平和について考え行動していく。そして次の世代に確実に繋いでいく。永久に平和が続くように。その為に私は学び行動していくことを決意しました。

---

## 二度と過ちを繰り返さないために

品川学園 増田なずな  
一九四五年八月六日、午前八時十五分。広島が一瞬にして吹き飛び、何もかもが奪われた悪夢の

時間。そのことがどんなに恐ろしいことかと考えた時、思わず身震いしました。こんなに発展し、東京と同じくらい都会的な広島に、とても残酷な歴史があったことにあらためて気づかされました。

私は、この夏に平和使節の一員として広島を訪れました。広島駅に降り立ち、出口から外に出た時、立ち並ぶ大きなビルや人の多さに、「広島って今はこんなに発展しているんだ」と正直、とても驚きました。当時の人たちにはとても想像できないだろうなあ・・・とも思いました。

初日、初めに被爆体験講話を聴きました。講話をしてくださった柳川さんのお話はリアルで迫力があり、とても重みを感じました。アメリカの爆撃機、B29の立てる大音響、恐ろしい（原爆の）光を目にした時は、「もう死ぬんだ」と思ったそうです。

柳川さんのお話の中で、一番心に残っていることは「(今の) 平和は自然にできたものではない」という言葉です。今の平和な日本があるのも当時の日本や世界が味わった苦い経験の上に成り立っているのです。この言葉を忘れずに生きていきたいと思いました。

また、この日は原爆ドームも見学しました。今まで、映像や写真でしか見たことがなかったのですが、あらためて本物を見た時、強い衝撃を受けました。とても頑丈そうな作りでできた建物なのに、原爆は一瞬でこんな様子にまで破壊してしまうものなのだと考えると、恐ろしさが心身に伝わってきました。

次の日の朝には平和式典に参列しました。式典が開催された平和記念公園には多くの外国の方や中学生もあり、こんなにも多くの方が平和について考えているのだと思うと少し嬉しく思いました。また、式典の平和の誓いとして読み上げられた文章の中で、「(原爆が落とされた後) あのまま、人々があきらめてしまっていたら、(略) 苦しい中、必死で生きようとした人がいなければ、今の広島

はありません」と述べられていた箇所に、私は強く胸を打たれました。この言葉は一生忘れないと思います。

広島平和記念資料館では、当時の人々の悲惨な状況をとてもよく知ることができました。展示品の中でも、被爆された方々の遺品や日記を見た時にはとても悲しくなり、あらためて平和の尊さを痛感しました。

私は今回、広島に行くまでは、平和についてあまり深く考えたことがなかったように思います。しかし、この平和使節としての体験を通じて、今、自分が安全な場所で穏やかに暮らせていることがどれだけありがたい事なのかという事実にあらためて気が付かされました。今、私ができることは、この事実を友人や周りの人に伝えていくことです。少しでも平和に対する関心を持ってもらうために、これからもこの思いについて積極的に広めていきたいと思っています。



## 平和な世界にするために

豊葉の杜学園 堤 紗菜

広島的第一印象は、本当に七十二年前に原子爆弾が投下されたのかと思うぐらい活気あふれるところでした。私の周りには誰も戦争を体験した人がなくて、二年生ぐらいの時から本や映画などを見て学んでいました。でも、今回の広島派遣では本やインターネットに載っていないことがたくさん学べました。その中でも特に印象に残ったことが三つあります。

一つ目は、被爆者講話です。柳川良子さんにお話をうかがいました。原子爆弾が落された後の広島は、生き地獄と言われていました。その当時は食べるものがなく配給制で、親は必死に苦労してお弁当を作っていたそうです。柳川さんは、下敷きになって助かったときに、生きていることも不思議だったそうです。どのお話も目をそむけたく

なるほど、考えるだけですさまじい内容でした。でも、柳川さんは強く語っていました。

二つ目は、原爆ドームです。原爆ドームは、一時期取り壊される可能性がありましたが、全国的に署名運動が始まり、世界遺産になったそうです。原爆ドームは、中が空洞になっていてがれきだらけでした。原子爆弾の威力や恐ろしさを改めて知りました。

三つめは、平和記念資料館です。原子爆弾が投下される前はにぎやかな町でしたが、投下された後は、建物がほとんど残っていないさら地でした。八時十五分で止まっている時計もありました。中でも、黒くこげた三輪車は衝撃的でした。真っ黒でした。一瞬にしてこんな風になるなんて、考えられもしませんでした。

この三日間は、とても貴重な経験でした。私が広島に行って感じたことは、平和は常にあるものではなく、自分たちで作っていくものだということです。家族や友達がいて、毎日何の不便もなく生活することは、当たり前ではありません。日本は、戦争を経験した人がいるからこそ、平和が保たれています。最近では、北朝鮮の問題が多く取り上げられています。核兵器の威力は、七十二年前の十倍にもなったそうです。これを私たちは見て見ぬふりをしていいのでしょうか。こうしている間にも、核兵器はどんどん威力を上げているかもしれません。罪のない多くの人たちを犠牲にしたくありません。だからこそ私達は、この三日間で学んだことを伝えていかなければならないと思います。少しでも多くの人に、原子爆弾のことについて知ってもらいたいです。伝えていけば、原子爆弾や核のことについて意識は変わると思います。そして、それが日本や世界へと広がり、世界みんなが平和に過ごせるようにしたいです。平和とは、毎日笑って争いごともなく生きることだと思います。

## 《派遣生の感想》

(一部抜粋)

Q. 広島に行く前と後で、平和に対して自分の中で変わったこと（もしくは、平和について改めて感じたこと・考えたこと）

- ・生まれてから平和な環境でしか過ごしたことがないことはとても良いことだが、今の平和は先の戦争があって保たれているという強い意識が芽生えた
- ・「戦争」「平和」を一言で終わらせてはならないということ
- ・平和であることに感謝しなければならないと思った。
- ・今では当たり前の平和や幸せで何不自由ない生活を当たり前だとは思ってははいけない。
- ・平和は皆が平和とは何かを考えて、平和を望まないと変わらない。
- ・命がどれほど大切で、戦争というのがどれほど悲惨かを知った。
- ・平和は当たり前のことではない。
- ・今ある平和の重要さ。
- ・平和記念式典に参列し、世界中の人々が平和を望んでいることを感じた。
- ・当たり前の日常のありがたさ。
- ・「戦争」「平和」を一言で終わらせてはならないということ。
- ・広島に行く前は、平和は当たり前にあるものであり、これからも継続するものだと思っていたが、平和を継続し、次世代に引き継ぐことは難しいことはだと思った。
- ・平和は常にあるのではなく、自分達で作っていくこと。

Q. 同級生または後輩へ平和について一番伝えたいメッセージは。

- ・日本にどんなことが起きて、どれ程の苦しみが生まれたかということを知ってほしい。
- ・「今の当たり前の世の中こそが幸せと呼べる」この世の中は理不尽だらけかおもしろいけど、周りの友達や家族がいるということこそが当たり前ではないことを理解してほしい。
- ・どうか1人の人間としてどう生きていくべきか関心を持ってほしい。
- ・あの出来事がもう二度と起こらないように、私達一人ひとりが平和について、まず考えるべきだし、いま私達が握っている“平和のバトン”をしっかりと次の世代に受け継がなければならない。
- ・世界各国の人々が「平和」を願っていますが、一番大切なのはその願う気持ちを続けさせることだと思います。願う気持ちも大切ですが、それを次の世代、また次の世代とずっと伝えていくことが「平和」であり、それが私達の義務だと思います。
- ・「平和」という一言で表せる環境を当たり前と思って日々を過ごすのではなく、「なぜ日本は平和なのか」、そして「先人たちがどのような苦勞をしたのか」を知ってそれを更に知らない人に伝えてほしい。

## 4. 被爆者講話



### 被爆者講話

柳川 良子 氏

品川区の中学生の皆さんが、平和使節という大役を担い、明日の原爆の日を前によくお出で下さいました。広島駅に着いて、現在の景色をご覧になって、いろんな感想をお持ちだろうと思います。本当に想像がつかないかもしれませんが、今から70数年前の日本は、世界の大国であるアメリカやイギリス、そして中国を相手に、すさまじい戦争を繰り広げていたのです。その戦争が終わる10日ほど前のここ広島に、世界の歴史上初めて原子爆弾をアメリカの飛行機が投下したのです。そのために、広島の市街の全てが吹っ飛び、火の海の生き地獄の中で、十数余万の人々があっと言う間に命を絶たれ、そしてまた3日後、長崎に原子爆弾が投下され、これ又大惨事を引き起こし、ついに日本は連合軍に対して無条件降伏を受け入れて、第二次世界大戦が終結したのです。あの時、私は16歳でした。女学校の4年生ということは、現在の高校1年生です。私はよくぞ今日まで、生きていたものだと思うこの頃です。皆さん方とお会いし、お話しすることが不思議なご

縁だなと思います。

当時はすさまじい戦争の真っ只中で、日本国中、1億総動員といって、当時の中学生以上の者は、学校で勉強やら運動やら遊んだりさせてもらうことは出来ない時代でした。とにかくお国の命令一下、軍隊の支配のもとで、それぞれの学校が軍需工場に行き行って働かされていました。広島は殊に軍部として、兵器廠（へいきしょう）、被服廠（ひふくしょう）、糧秣廠（りょうまつしょう）という大きな軍隊の工場があったのです。それぞれの学校が、その工場に振り分けられ、勤労働員をさせられていましたから、ほとんど勉強等した覚えがありません。でも私は一応受験組ということでしたから、ABCの基本の単語ぐらいは勉強したと思うのですが、敵国語として、決して使ってはならないということになり、全部ダメになった時代なんです。本当に皆さんが想像のつかない時代を生きてきました。最終的には、私達は、広島市の南にある陸軍の糧秣廠（りょうまつしょう）で、兵隊さんが食べる肉の缶詰を作る工場に働いていたのです。初めのうちは、みんなで缶を丁寧に検査して、どんどん肉を詰めて、機械で蓋をし、箱に詰める。1日中立ちっ放しの流れ作業で大変だったんですけども、毎日に缶詰を作る材料がなくなり、もう糧秣廠（りょうまつしょう）としての仕事が出来なくなりました。今度は広島に空港を作るため、朝から晩まで、みんなで土運びをさせられて、大変な作業でした。またある時は、兵隊さんに出られた後の男手の足りなくなった田舎へ行って、農作業のお手伝いもしました。当時の中学生の我々は、今思うと食べるものも貧しくて、全

てのものが配給制度ですから、少しばかりの米を工夫して、働きに行く子ども達のために、当時の親達は本当に苦勞してお弁当を作ってくれたんだと、今思うんです。ご飯の中に大豆やコウリヤンやお芋がいっぱい入って、真ん中に1つ梅干しを入れてもらった日の丸弁当を持っていきました。その量もあまり十分じゃなかったのですが、「戦争に勝つまでは贅沢は敵だ」「欲しがりません、勝つまでは」という言葉を合い言葉にして、みんな歯を食いしばって頑張っていた時代だったんです。

でも、日本の戦況がだんだん厳しくなっていくのです。初めの頃は、「陥落した」「勝った勝った」と言って、旗行列をしたり、提灯行列をして、みんな興奮状態で、「日本は強い、絶対に勝つ」と言っていたのですが、次第に、日本の戦場、殊に南のアッツ島、サイパン島、硫黄島という、非常に大切な陣営がどんどん敵の手に落ちて、全滅、玉砕というニュースが続いていき、ついに沖縄も米軍の手に落ちるのです。沖縄は海から空から陸から三方攻めになって、市民は逃げ惑って、死との恐怖に立たされ、集団自決など、あの沖縄の戦争の歴史は日本人として決して忘れてはならないと思います。いつの日か勉強に沖縄も行ってみて下さい。

今度は、沖縄を基地にした米軍機が日本の国土をますます襲ってくる訳ですから。日本の各地が空襲空襲であちこちの都市が沢山の犠牲者を生んで、本当に一体どうなるんだろうか。非常に不安で、今度は本土のどこへ上陸されるんだろうかと不安な時代背景となってくるんです。そういう、1945年の春のあたりから、今日はお話しします。

あの年の春、私の学校が母体となって、広島に女子高等師範学校が新設されたんです。当時は女子の高等師範学校というと、東京

のお茶の水と奈良の女高師と2校のみです。全国各地の若い男の先生方は、軍隊に引っ張り出されて行かれるので教員の数も少なくなるということもあったのでしょう。第3校目が広島に新設され、私達はその女子高等師範学校の附属高等女学校の4年生という名目です。その4年生の中から数名の者が本校に帰って、学校の事務のお手伝いをしてほしいという命令があり、たまたま私はその数名の中に入っており、ここYMCAの会場から直線で1キロぐらい南の千田町にある学校に通うようになっていたのです。伝統のある立派な大きな学校でしたが、各学年が、どんどん勤勞作業に駆り出されて行きますから、学校の中は、ガラーンとした雰囲気でした。そんな中、全国から、よりすぐられた優秀な女子高等師範の生徒として入ってきた新入生が50~60名いました。その人達は校内にある寄宿舍で寝起きをしていました。その他、全校生徒が1,000人位の中には体が弱くて、みんなと一緒に勤勞作業、きつい仕事は出来ないという人がいる訳です。そういう人達が全体で20~30人おり、校内の一室に集められ、軍隊の手仕事をさせられていました。

6月に入った頃から、日本の軍隊もせっぱ詰まっていたんでしょうか。とにかく軍隊に女の子の手も借りたいということで、近くの軍隊へ行ってお手伝いするという命令が出られます。それは無線通信の仕事で50人ぐらいが学校に集められて、機械の訓練をさせられている人達がおりました。8月6日という原爆のあの運命の日には、千田町の広い校内に、全体で120~130名の生徒がいたという訳です。

あの日も朝から熱い太陽が照りつけるもので、校長先生のお話を聞き、朝礼が終わる

と、急いでそれぞれの部署に入って行きました。私は、文部省からお客様が見える日なので、急いで教務室に入り、2・3人の先生方と打ち合わせが始まりました。すると、間もなくでした。遠くの方から、ブーン、ブーン、かすかに不気味な金属音が聞こえるんです。当時の私達は、敵機の爆音を聞いて、ゲルマンだ、ロッキードだ、ボーイングだ、と大体聞き分けていたのです。そういう訓練もさせられていたのです。私は「サイレンも鳴っていないのになぜだ。あの音はB-29の音に違いない」と、何とも言えない胸騒ぎを覚えました。その時でした。シューっという大音響とともに、太陽が真っ二つに裂けたかと思うような、恐ろしい光と同時に、目の前に見えていた2階建ての校舎がふわーっと真っ白く浮き上がったと思うと、一瞬ですが、それらがバラバラに飛び散るのを見た時、「あっ、私はこれで死ぬんだ」と、感じたことは覚えているのですが、後は一体どうなったのか。あの大きな建物が突っ込んできて、私はもう下敷きになって、気を失っていたのでしょう。何も記憶がありません。何時間ぐらい意識を失っていたのかわかりません。



そのうちに、何とも言えない苦しそうな声で、「先生、先生、助けて。先生」っていう、かすかな声が聞こえて、ふーっと我に返るんですが、どうしたのか、真っ暗闇の中で、重たいものにグググググ押しつけられて、身

動きも出来ない状態で下敷きになっているんです。でも、「私は死んでなんかいないんだ。生きてるんだ」と思った途端に、「死にたくない。死にたくない」と思って、「先生、助けて。先生、中村です」。私は旧姓、中村と申します。「先生、助けて」、叫び続けたことでした。初めの頃は誰かの声も聞こえたのですが、次第に誰の声も聞こえなくなるんです。「ああ。私は生きてるのに、死んでなんかいないのに、このまま救援隊が助けに来てくれるのを待つのでは、きっとどこからか火の手が上がるに違いない。私は生きながらにして、今度は火に巻かれて焼け死ななきゃならないんだろうか」と思った時、孤独感というのか、恐怖心というのか、本当に気が狂うような思いでした。あの頃の私達は、「お国の為なら、いつでも喜んで死にます」「この命など惜しいものではありません」と言っていたのよ。でも私は、気が狂うように、「先生、助けて。先生」と叫び続けたことでした。

でも、「本当に、もうだめだ」と諦めかけた時、何か遠くのほうで、「中村。中村、生きてるか」というようなかすかな声が聞こえたような気がして、「あ。あの声は中本先生の声じゃないかしら」と思いながら、押しつけられていて、身動きは出来ませんが、目だけは動かしたんでしょうかね。声のする方の暗闇の中を必死になって探していましたが、遥か彼方、頭の上にぽつーんと、一点の薄明かりを感じるんです。「あーっ」と思って見ていると、その光が少しずつ少しずつおりてくるのですが、どうしたのか、何重にも木や柱が重なっているのが、ぼーっと見えるんです。「ああ、私は焼け死ぬなんて嫌だ。何とかして自分の力で、あの光に向かってはい上がることが出来たら焼け死なずに済むんだ。死にたくない。死にたくない」と思うのです

が、身動き出来ないのです。左手だけが動いてくれたので、手当たり次第に何か捕まえて、必死になって体を動かし、少しばかりの空間に出たんでしょうね。そこを起点にして、1段、また1段、左手のみを動かしながら、また1段、1段と、あの薄明かりに向かって、苦労しながら、上がっていくんです。やっと、その上あたりに近づいた時に先生が見つけて下さったらしいのです。私の両肩を持って、ぐーっと引っ張り出して下さったのです。ここでは先生がべちゃんこに潰れてしまった2階の校舎の屋根の瓦を必死になって剥がしながら、中に向かって、「生きている者は自分の力で上がってくるんだ。助けに行くこと出来んぞ」って叫んでおられ、「あ、先生が潰れた屋根の瓦を剥がして下さって、あのほんの薄明かりで私は上がることが出来たんだ」と思って、もう一度先生を見ると、何と中本先生も血だるまで、大怪我をしておられて、その上に、首筋に1本の木切れが突き刺さったままでした。

そこから見る、何棟もある校舎も本館も図書館もべちゃんこです。遥か向こうの西の川土手の所にある大きな体育館も、鉄の骨組みが飴のように折れ曲がったように見えまじ、広い大きな校庭も夕暮れのように暗く、しかも土煙の中をじっと見ると、どこから集まってきたのか、沢山の人が右往左往して泣き叫んでるんです。よく見ると、その人が着ているものもボロボロとぶら下がっていたり、裸のように血だるまのような人達であったり、皮膚がぶら下がったような人達であったり、気が狂ったお母さんのような人が、真っ黒い赤ちゃんの塊のようなのを抱えて走っていたり、あっちでもこっちでも真っ赤な炎が吹き上がっているんです。一体何が起こったというのか、身体はブルブル震え

るんですけれども、私は潰れた校舎の2階の屋根の上にいるんです。また何としても向こうに見える校庭に、自分の力でおりていかなきゃならないんです。この動く左手だけで、ズルズルズルズルと怖い思いをしながら、やっとやっとの思いで地上に立ち上がることが出来た時、「ああ。私は焼け死なずに済んだんだ。ああ、よかった」と思って、自分の姿を見ると、朝着ていたカーキ色の制服も、そして、かすりで作ったもんぺもビリビリに裂けて、血のりでベトベトですし、皮膚が出ているのです。その上、右手が動かないはずなんです。右手がすとーんと土の上に落ちていますよ。鎖骨が半分に折れて、肩がこのお乳の下あたりについてるんです。びっくりして、まずこの手で拾い上げようとして、ふっと見ると、こっちの左手は動いてはくれたんですが、よく見ると、この3本の指がバラバラにぶら下がっていますし、血だらけです。その上、このほっぺたが斜めに切れて、ぶら下がり、左の頬や首にガラスがいっぱい立ち込んでいるのがわかりました。私はそこで、ずずずーっと腰が抜けたように座り込んだまま、もう、動くことも出来ないでおりました。

どのぐらいの時間が経ったのかわかりませんが、多賀先生という、小柄な年配の女の先生が私を見つけて下さったらしいんです。顔を覗き込むようにして、「あなた、誰？誰？」って言われたので、「先生、中村です」「中村さんだったの。しっかりするのよ。大怪我してる。しっかりするのよ」と言いながら、小柄な先生が私をぐーっと持って立ち上がらせて下さるのです。「しっかりしてちょうだい。とにかく日赤病院に行きましょう」と言って、千田町の学校のすぐ西隣が大きな日赤病院で現在もあります。その「日赤病院に行きましょう」と言って、私を抱きかかえ

るようにして、沢山の怪我人をかき分けながら、やっとやっとの思いで日赤病院にたどり着くことは出来たのですが、何と病院の中も全てのものが吹っ飛んでいて、とても治療など受けられる状態じゃないんです。その上、沢山の怪我人や大火傷した人達が廊下に横たわっていますし、あっちにもこっちにも死体がゴロゴロ転がっているのです。そんな中でも、白い服を着た看護婦さん達は気丈に担架を持って、あちこちに転がっている死体を集めて、どこかに運んでおられるような状態なんです。当時、大きな病院にも、戦地で病気になったり、怪我をした兵隊が送り返されていて、日赤病院にも沢山入院していたのです。兵隊さんが入院すると、みんな白い着物を着せられて、カーキ色の戦闘帽をかぶるんで、白衣の勇士と言っていました。その傷病兵の中のほんの数名（3~4名）が、沢山の怪我人や死体の中を日本刀を抜いて、刀をギラギラさせながら、悲鳴を上げて走り回ります。あの姿にも、ぞっとしました。



先生が、「この病院の中も危険だから、もう一遍学校へ帰ろう。しっかりしてちょうだい、中村さん」と言って、私を励ましながら、あちこちに吹っ飛んでいる薬品や機材の中から、2・3の布切れを見つけてきて、ぶるーんとぶら下がっている右手をぐぐっと持ち上げて、三角巾で前につけて下さるんです。そして、ほっぺたをブルブルっと、持ち上げ、

先生が大きなガラスをキュッキュキュッと引き抜きながら、ぐるぐるっと包帯で巻いては下さったのですが、あっという間に、血のりでべたべたで目も顔も腫れ上がって、前が見えないような状態になりました。またまた先生に抱きかかえられながら、日赤病院から、すぐ近くの校庭の裏門あたりにたどり着くんです。

何と校庭の至る所にも、沢山の怪我人が並ぶようにして横たわっているんです。そして、土手に何力所か防空壕が作ってありますが、その中も、いっぱい互いの名前を呼び合うような悲鳴が聞こえていましたが、私はもう誰に声をかける力もなくて、そこらにドーンと座り込んだままで、動くことが出来ませんでした。私の何人か向こうに、あの朝、お声を聞いた校長先生も血まみれになって横になっておられました。そこへ、よったよったしながら、背の高い年配の田中先生が沢山の怪我人の中から校長先生を見つけられ、前へ立たれるんです。田中先生は、あの朝、下級生を450名ぐらい引率して、市の中心部の雑魚場町という所へ建物疎開作業に出られた責任者なのです。

皆さんは「建物疎開作業」という言葉を知っていますか。日本の家屋は木造が多いよね。敵機が攻めてきて、ボンボンボンボン、焼夷弾、爆弾を落とされると、あっという間に大火災になる。広島はまだあまり大きな空襲がなかったので、市内の何力所かの立て込んでいるお家を1度に30・40軒まとめて倒し、空間を作るのです。お国が「何月何日までには立ち退け」と言って、命令するんです。お国に刃向かうことが出来ない時代で、仕方なく荷物をまとめて、田舎やそれぞれの所に出ていく。そうすると1度に何十軒の空き家が出来るとでしょう。その空き家を、みんなの

手で倒すんです。今のように、あまり機動力もありません。空き家の柱にロープをかけて、みんなで、よいしょ、よいしょ、ドーンと、お家を倒すのです。倒れた家の柱や瓦をどんどん片付けるのが、当時皆さん方の年代の中学1・2年生の大変な勤労作業なのです。うちの学校から450名位出たのです。市内全体では7,000人ぐらい出ているらしいのです。中心部は皆全滅なんです。そのことを田中先生が校長先生の前に立たれて、「校長先生、今朝ほど雑魚場方面に出動した1・2年生は全滅状態であります」と震えるような声でおっしゃるので、ふと見上げると、先生は挙手の礼をしながら報告しておられるのですが、肩、肘あたりから大火傷をして、皮膚がぶるっと30・40センチ、ぶら下がっているのです。大火傷の顔の皮膚も、ぶるっとぶら下がっているのですよ。ぞーっとしました。報告を終えられると、どどどと転がるように座り込んで、今度は先生が靴や靴下まで脱がれるのです。先生、何なさるんだろうと思って見ていたら、ぶら下がっている皮膚の皮を大火傷した肌に、一枚一枚貼り戻しながら、ご自分の脱いだ靴下を手袋のかわりにはめられたのです。あの時の悲惨な先生の姿が今でも目の奥に焼きついていて離れません。

あれから間もなくでした。私達の目の前に1機の小型の飛行機が低空でダーッと降りてきて、あっという間に飛び上がるんです。小型の飛行機とはいえ、飛行機の翼に描いてあるアメリカの星のマークを見た時、ぞーっとしました。当時、低空で現れると、バラバラバラッと、機関銃で撃ち殺される話など聞いてましたから、ぞっとしたことも忘れられません。そのことが資料館に残されているのです。その資料によりますと、あの日、午

後2時から3時にかけて、アメリカの飛行機が数機、この広島の上空を旋回して写真を撮った。その写真も展示されています。あの書類に2時から3時と書いてあるんです。当時私達は、今の皆さんのように時計など持たせてもらう時代じゃありませんし、第一、時計もないので、あの日の時間のことはわかりませんが「あ。あれが2時から3時だったんだ」と思うんです。それも随分後に知ります。原爆が8時15分に落とされたということも後に知るのですが、午後の2時から3時ということは、もう既に4時間、5時間以上も経っているということですよ。私がさっきからお話した、下敷きになって、意識を失って、やっと助け出されて、ここにいるということを想像してみてくださいね。

あの時点では、大きな学校がぺっちゃんこになって、本館も図書館もみんな潰れているんですが、まだ火を吹いていなかったのです。時々どこからか、「先生、助けて」という声が聞こえていたのです。そして、まだまだ沢山の人が逃げ遅れて来て、「広島の中が全部大火災だ。火の海だ」と言うんです。私は学校の近くに大きな爆弾が落ちたであろうと思うのに、全市が一度に火の海ということは一体どういうことなのか、想像もつきませんでした。どうやって家に帰ったらいいんだろうと思いました。

だんだん夕方になってきます。体育館のすぐ上の土手に大きな魚市場があって、学校と同じように、ぺっちゃんこになっているんですが、その大きな魚市場が急に、ぱーっと燃え上がるんです。その炎を見られた校長先生が立ち上がられて、「生徒達、自分の力で立ち上げられる者は立ち上がってくれ。学校も非常に危険な状態になったから、どうか同じ方向に帰れる者達が助け合って、力を出し合っ

て、一時も早く学校を退去しなさい」という命令が出たんです。退去しろと言われても、「私、どうやって立ち上がったらいんだろう、どうやって歩いて帰れるのだろう」と思っていた所に、2・3人の生徒が駆けつけてきて、思いがけず私を抱きかかえて、立ち上がらせてくれるんです。その人達の手や肩を借りながら、ぺちゃんこの学校を後にしました。あれからほんの数時間後、学校にも火の手が移って、一晩中燃え続けて、下敷きのままで亡くなった人達が校内に29名いたことを戦争が終わって何カ月も後に、私ども生き残った者があの焼け跡へ集まる事が出来た時に知らされました。あの朝、朝礼で顔を合わせた130名のうち、30名近くが亡くなっていったのです。そしてあの田中先生も、2日ぐらい後、あの校庭の片隅でついに息を引き取られたんだということも聞かされました。本当に私は、あの時の先生の悲惨な姿、そして学校の中で30名近い生徒が焼け死んだことなど、本当にたまらない思いで、今もお話しながら、あの時の光景が浮かんで来ます。



あれから私達3・4名は、千田町から、南から北へ電車を線路伝いに歩いたのです。私の目には、もう夕方で、7~10時間経ってる訳ですから、火の海というよりか、はるか彼方の北の山並が直接に見えたり、南の瀬戸内の島影が見えるぐらいの一面の焼け野原のように見えた記憶なのです。そして、ぽつん

ぽつんと小さなビルが焼け残ったのが見えまして。今のような高い大きなビルがいっぱいある訳じゃなく、3・4階建てのビルが何カ所か目に止まりました。そして時折、そのビルの高さほどの土煙が地面から、ポーン、ポーンと吹き上がるのを見ながら歩きます。本当に広島市民は一体どこに消えたのかと思うほど、動く人の姿を私はほとんど見ておりません。線路伝いに、当時は広島大学、市役所、そしてしばらく歩いて、日本銀行の広島支店があり、これは1つだけ現在も記念に残されていますが、ちょうどそのあたりに来た時です。1台の真っ黒焦げの電車が残っていて、何とその電車の窓から、何体もの死体が焼けただれて、ぶら下がっているのを見たのです。皆さん、想像つかないと思いますけど。そこからもう間もなく、現在の紙屋町交差点から北の広島城を取り囲む、このあたりは、当時は全部軍隊の敷地だったんです。その入り口から西の方の側には、何棟もの兵舎や、兵隊や馬がいっぱいいて、東側は広い練兵場がありました。その入り口が高い石垣で正門になっていて、そのあたりまで来た時、数え切れないほどの死体が折り重なるように死んでいるのです。そして、私もお伝えするのに身が震うんですけど、その沢山の死体の中に、あの石垣に沿うようにして、2体か3体の腫れ上がった真っ黒い死体は立ったままです。しかも、手を挙げて、仁王立ちで目をぐっとあけ、長い舌をぶら下げているのです。皆さん、想像つかないでしょうけど、あの光景を思い出すたびに身が震えます。そういう死体を見ながら、軍隊の中を歩いている道です。ここで1つだけ忘れていけないから言っておきましょう。あの原爆ドームの真上あたりで爆発した原子爆弾がすごい熱線と熱風を吹き散らすんです。そのも

のすごい爆風のために、東西、みんな四方八方に全てのものが吹っ飛んで、火の海となる。原爆ドームというのは、当時、産業奨励館とって、大きな立派な文化の中心みたいな建物だったんです。あの大きな建物に爆風が直角に突き刺さっているために辛うじて立っている、まことに不思議な負の遺産として世界遺産に登録されているんだそうです。あのドームのすぐ50~60m離れた地点を私は通過しているんです。ですから、死体の中に立ったままの死体というのと、そこと結び合う訳です。熱心な皆さん方ですから、私も今日は思い切って、そのことも伝えました。本当に本当に思い出すだけでも、たまらない思いが致します。

さてそこから、北へ北へと我が家の方向に歩くんですけど、兵隊も、馬も、みんなもう真っ黒焦げで死んでるんです。どういう訳か、転がって重なるように死んでいる馬は、はらわたをえぐられたようなのも、いっぱいいました。真っ黒い死体の山がずっと続く、その中で、私達の動く姿を見つけられたのか、まだ息が残った兵隊さんもあったのでしょうか、その死体の中から手を出して、「助けてくれや。水くれや」というあの声が、今も忘れられないんです。私どもも水の1滴も持っていませんし、どうしてあげることも出来ないの、あの時に見て見ぬふりをして、立ち去ったのです。私は、あのことが未だに、どうしてあげることも出来なかったとはいえ、あの時、私達は人を見殺しにして逃げたんだというのは、何とも言いようのない心の傷として残されています。

そこから、間もなく三篠橋に出ます。中心地の原爆ドームの所が相生橋で、その次の次の北の橋が三篠橋です。その橋を渡り切ったら我が家があるのです。「ああ、三篠橋を渡っ

たら我が家だ。家に帰れば母さんが待っていてくれるよ。この手当てがしてもらえる。お水が飲めるんだ」と思って、みんなに支えられながら必死に、やっと三篠橋にたどり着くのですが、何と三篠橋の上にも、沢山の怪我人や死体がゴロゴロ転がっている。その人達をかき分けるようにしてね、やっと西のたもとに立って、横川町の我が家の方向を見ると、もう何も無い一面の焼け野原なんです。たった1つだけ、三篠の信用組合とって、小さな金融機関のビルだけが残ったのが目にまりました。「ああ。私はもう帰る家も無いんだ」と思った時、本当に愕然として、「もういい。ここで死んでもいいんだ」と、あの時に初めて、私は死んでもいいと思ったほどでした。本当に苦しくてね。最後に「お水、飲ませて」って言ったけど、「中村さん、しっかりして。水、飲んだら死ぬよ、もうちょっと頑張つてよ」と言われながら、またまたみんなに抱きかかえられて、川土手を北へ向かうんです。中心部から1キロか、1.2・3キロの地点です。もうそのあたりから田舎道へと入っていきます。大火災は止まっていたけど、ポツンポツンとある家は、ほとんど全壊、半壊の状態でした。日がとっぷり暮れて、とにかく私をどこかで休ませなきゃと、みんな思ってくれたんでしょう。同じ学年の中に、木本さんという人の家がこのあたりにあるのだとって探してくれました。ほとんどの家が全壊しているのに、不思議に彼女の家の中のものは皆、吹っ飛んでいたようですが、倒れてはいなく柱や廊下が残ってたのです。その家をお願いして、廊下の片隅に、私は血まみれの体を横にならせてもらったのです。私を助けて歩いてくれた人達は、それぞれの家に、田舎の方向に向かって、急いで別れていきました。私は顔も口も腫れ上がって

いて、水も飲めない状態で、木本さんのおばさんが心配して、唇を引っ張って、スプーンで何杯かお水を注ぎ込んで下さったことも忘れられませんが、本当に長い苦しい夜でした。川土手の東側の倒れている家が夜通し、何軒もボンボン燃えるのを見ながら過ごしました。

やっと夜が明けかけた頃です。「あ!! そうだ!! 横川の町の人達は何かあった時に町から1キロぐらい離れた所に小高い三滝の山があって、その麓にある大きな竹やぶの中に避難しているんだ」ということを思い出して「家族の誰かが生きててくれたら、そこへ避難してるかもしれない」と思い、私はおばさんにそのことを伝えて、彼女の家を立ち去ろうとするんです。おばさんが、「大怪我して大変なのに1人で行けるかしら、大丈夫かしら」と言いながら、「どうしてもと言うんだったら、じゃあ」と言って、1本の杖を左手に持たせて下さったんです。「もし家の人が見つからなかったら、またここへ帰っておいでよ」と言って送り出して下さった、おばさんの気持ちを今でも感謝しております。

今度はその杖を頼りに、1人で1キロ前後あるその竹やぶを目指して、我が家の誰かに会いたい一心で歩くんですが、1人で歩く道のは本当に厳しかったことを覚えています。やっとたどり着いた竹やぶ、あっちこっち見て回るんですが、竹やぶの中は、もういっぱい怪我人や大火傷した人達が泣き叫んでいるのです。「阿鼻叫喚」という言葉がありますが、まさに地獄のうめき声です。そんな中で動ける人達が、土手の下の河原へ死体をずるずる引っ張って行き、ポーンと投げ込むようにして焼いているのです。もう何力所も何力所も死体の山が築かれています。何せ沢山の死体ですし、暑い時ですから早く

処置する必要があったのでしょうかね。人間を焼く臭いにおいといったらありませんよ。もうもうと立ち込んでいる臭い煙の中を必死になって、私は何力所もある竹やぶの中を、我が家の誰かに会いたい一心で探して歩くのですが、誰にも会えないのです。「もうだめかな。みんな死んじゃったのかな」と思いながら、呆然として、その土手から、たった1つだけ三篠の信用組合が、はるか向こうに見えるんです。「ああ、そうだ。我が家はあの信用組合のすぐ前だから、あれを目当てに、最後の力を振り絞って、我が家の跡へ行ってみよう。何か手がかりがつかめるかもしれない」と思い、杖を頼りに焼け跡の瓦礫の上を一步一步必死になって歩くんです。あっちにもこっちにも死体がごろごろ転がっているのです。「うちのおばあちゃんじゃないかな。うちのお母さんじゃないかな」とのぞき込んでみるのですが、どの死体も腫れ上がって真っ黒けで、男の人か女の人かもわからないような者ばかりでした。やっとやっとの思いで三篠の信用組合の前に立つことが出来ました。そこは一面の焼け野原で、誰一人動いている人もいません。「ああ。我が家は、ここなんだけどな」と思って、じっと目を凝らしながら、広い焼け跡をじっと見て、「きっと、このあたりなんだけど」と目を据えて、見ていたら、大きな鉄の金庫が焼けただれてひっくり返っているのが見えたのです。「あっ。あれはもしかして、我が家の店にあった金庫じゃないかしら。ああ」と思いながら、また右に目をやると、我が家の中庭にあった大きな石の灯籠が吹っ飛んでいるのが見えたのです。「あ。ここはやっぱり我が家の焼け跡だ。間違いない。あの下には防空壕があるんだ。防空壕へ」と思って、行こうとすると、思いがけないことがありました。防空壕の中

に私の兄がいたらしいんですよ。私の足音を聞いたのか、飛び出てきてね。兄は頭に包帯して、血が滲んでいて大きな目で私の顔をのぞき込みながら、「良子か？良子か？良子か、生きとったのか」って言ってくれてね。そこで初めて肉親に会えたんです。兄が「しっかりせいよ。母さんも生きとるぞ」と教えてくれたのです。お母さんが生きるといっても、そこに姿はありませんでした。



当時の兄は、東京の大学の2年生で、大学生もみんながお国のために勤労作業にかり出されていました。兄は岩手県の農場にいたのですが、2~3週間前に足を怪我して、治療のために広島に送り返されていたのです。8月6日は、たまたま我が家から近くのお医者さんに行って、足の手当てをしてもらう順番を待っている時に、原爆の下敷きになったらしいんです。でも運がよかったというのか、体力があったんでしょう。はい上がることが出来、横川の町の尾根伝いに我が家へと帰ったんだそうです。「おばあちゃん、お母さん」と探したけど、もう誰の声もしないし、姿がないので、自分も逃げようとして、ふと見たら、防空壕の蓋が開いているので、兄が気をきかせて防空壕に蓋をして、逃げようとしたそうです。その時に、奥の離れの座敷の下敷きになっていたらしい母が「ここにいるよ。助けて。ここにいるよ」って叫び、その声を聞いた兄が、下半身が動くことの出来ない母

を必死の思いで助け出して「昨日は母を背負うようにして、三滝の山へ逃げたんだよ」って言いました。そして今朝、夜が明けるのを待って、ここへ帰って見たら、何も無い、我が家の焼け跡だけでも防空壕の蓋を開けてみたそうです。そうしたら、穴の一番奥の方に、いざという日のために非常持ち出しという袋が作られていて、兄が蓋を閉めて逃げたおかげで、当時、非常に貴重だったお米、みそ、しょうゆ、家族の衣類や医薬品が焼け残っていたそうです。「お母さん、これは今、貴重なお米だ」と言っても、何キロぐらいあったか、知りませんが、「貴重だから、僕はこれを守るために残るから、お母さん、早く逃げなさい」と言って、母が立ち去った後だと言うんです。あの頃広島も、2・3回、空襲の経験がありましたから、何かあった時には、家族の誰もがどこにいても、最終的には父親が生まれたおばあちゃんの家、宮島の手前の地御前という村に、もう80歳近いおばあちゃんがいたのです。そのおばあちゃんの家で会おうという約束が我が家には出来ていたのです。そのために母は、私や弟達が、きっと元気でおばあちゃんの家に着いている姿が見たかったんでしょうね。兄を置いて、頑張って1人で立ち去ったのだと言うんです。私にも「早くお母さんの後を追え」と言いましたが、私はもう兄に出会ってから、とって1人で動く力はありませんでした。兄が大怪我をしている私をほっておけないぞとってくれるらしいんです。また防空壕に蓋をして、焼けた家の瓦礫やレンガをその上に乗せて、何かわからないようにカモフラージュして、私を抱きかかえて立ち上がらせてくれるんです。兄に背負われるようにして、最後の目的地のおばあちゃんの家を目指すことになるのです。

広島には当時、7本の川がありました。兄と私は、その7本の川の一番西の川土手を宮島の方向へと歩くのですが、何とその西の川の流れにも、真っ黒くなった死体が、牛や馬の死体と一緒に浮き沈みしながら流れているのをこの目で見たんです。でもあの時の私は、もう、どんな死体を見ても、怖いとか、恐ろしいとか、本当に人間じゃなかったのでしょうか。何の感情もなく、ただただ生きていて、ただただおばあちゃんの家を目指すことで、どうやって歩いたのか詳しく覚えておりません。今思うと、あの一番西の川でさえ、様々な死体が浮き沈みながら流れているということは、1発の原子爆弾の炸裂によって、一瞬のうちに焼けただれて、大火傷して、中心部に居た人達は即死の状態、吹き飛ばされ、何千何万の人が死んだんだということを、皆さん、戦争の悲惨さを忘れないで下さいね。本当にそうなんです。そしてまた、大怪我をした人達が水を求めて川に入って、倒れて死んでいった人など、海の藻くずとなってしまわれた沢山の犠牲者がいるのです。私は、いつもあの川の上を電車で通る時に、心の中で犠牲者に手を合わさずにおれないのですよ。皆さん、想像してみてくださいね。

さて、私達はやっとの思いで、2日目の夜遅く、おばあちゃんの家にとどり着くんです。叔父や叔母達や近くに住んでいた人達、みんな集まって、待っていてくれたのでしょうか。お化けのような私どもの姿を見て、「良子。ほんまに良子ちゃんか？」って、みんな、びっくり仰天していました。「しっかりせいよ」。弟は幸司というのですが、「幸司はゆうべ遅くにたどり着いているけど、今、奥の座敷に寝かせてあるよ。あんたもしっかりせいよ」と言って、私を励ましてくれるので

す。母親も今さっき着いたと言って、血まみれの服を脱いで、手足を洗って、伯母にもらった着物に着替えている所で、何はともあれ母親と兄弟3人が生きていたと思った時、ほっとしたことも忘れられません。そして、祖父母達は私の手当てを早くと思ったんでしょうね。大きな羽釜にお湯を沸かしてくれて、私を裸にして洗って着替えさせようと思ってくれたんでしょうけども、ビリビリ破れた血まみれの服も、日に当たってカチカチです。脱がず訳にもいかないから、みんなが寄ってたかって、はさみでパッチンパッチンパッチンと切り刻んで裸にしてくれた、あのはさみの音は覚えているのです。そして、頭からお湯をかけて洗おうとしてくれるんですが、頭の中にもガラスがあつたらしく、洗ってくれる伯母の指先が切れ、「ぎゃーぎゃーぎゃーぎゃー」という悲鳴は覚えているのですが、あれから数日間のこと、全く思い出せず、記憶が無いんです。「本当に数日間、死んだようになって寝てたんだよ」ということを後で聞かされました。ですから、あの3日後の長崎の原爆のことなども知るよしもありません。

バタバタバタバタ、忙しそうなる足音に、はっと我に返った時、奥の座敷に寝かせてある弟の息が引けるという時でした。私は初めて弟の姿を見に行こうとするんです。手をつたまま立つことが出来ないで、這うようにして、納戸から奥の座敷へと行くんです。大きな座敷に、当時は部屋いっぱいぐらいの麻で作った蚊帳が吊ってあり、その中に弟は1人寝かされているんです。お布団を2・3枚、背もたれにして、枕のような物を脇の下に立ててもらい、とにかく、臭い、臭いにおいで、蚊帳の上の天井は真っ黒くなるほどのハエがたかっていたことも忘れられません。弟はた

ただ苦しそうに泣き叫んでおりました。よく見ると、中学1年生だった弟は、当時みんな、戦闘帽というのをかぶっていて、戦闘帽をかぶっている部分だけがカッパの頭のように髪の毛を残して、あとは大火傷ですむけです。顔も手の皮膚もブルブル。赤く焼けただれた指がくっつかないよう、脱脂綿を丸めてはさんでありました。そして、ドロドロ流れる膿や血を、ぼろ布や新聞で吸うようにしてありました。臭い臭いにおいです。



あの時、沢山の人が広島から地御前村へも逃げて行っているのです。村の小学校、当時は国民学校と言っていて、国民学校も村のお寺にもお宮にも、沢山の怪我人や大火傷した人達で一杯です。村にたった1人しか居られぬ女医さんだけではどうすることも出来ないし薬も無いんです。だから、どんどん死んでいくのです。そんな中で、「昔から、やけどをした時には、野菜の汁が効くんだよ」と言って、おばあちゃんが弟のために家にあるキュウリやジャガイモをおろし金でおろして、その汁をつけてもらうのが唯一の治療だったんです。足の柔らかい所から、ウジ虫がボロボロボロこぼれ落ちるのを見た時に、ぞっとしたことも忘れられません。

そんな中で8月15日、とにかく一同、ラジオの前にみんな集まるんです。そこで私達はラジオを通して、初めて天皇陛下の声を聞かされました。私には何のことだか意味がわ

かりませんでした、「ポツダム宣言を受諾し」というような不明瞭な一節は覚えているのですが、あとは何のことだか意味がわかりませんでした。伯父が、「残念ながら日本は戦争に負けたんだ。連合軍に対して無条件降伏を受け入れて、ついに戦争は終わるけども、負けたんだ」と言って、悔しがって泣くんです。私は小さい時から軍国教育の中で、「日本は強い。神国日本が負ける訳がない。神風が吹くじゃないか。負ける訳ない」と必死な思いで育って今日に至っているんですから、「それはデマだ」と信じられませんでした。一方、兄貴は、玉音放送を聞いて間もなく、「俺は最後の1人まで戦うぞ」と言って、頭に包帯したまま、あっと言う間に東京の大学へとすっ飛んで出ていってしまうんです。弟の息がいつ引けるかという時なのに、本当にそういう時代だったのです。

あれから、どうしたのか、我が家の父親も、家に居たはずのおばあちゃんも姿を現さないのです。まさか2人が死んでいるとは思わないから、親戚の者達が何度か広島へ出ては探してくれるのですが、私の父は未だ、72年経った今日までも全く行方が知りません。当時は個人で商売は出来ず、お国から各業界毎に統制組合というのをつくらされて、たまたま、私の父親は自動車のタイヤとか、自転車のチューブタイヤとか、自転車やオートバイ等の関係の組合の理事長というお役を受けいたようで、軍隊とのつながりもあったんでしょうか。あの朝、早くに電話がかかって、父親は爆心地の相生橋のすぐ近くにある事務所に出ていったということの後母から聞かされたんです。あの時刻に父は爆心地に向かって出ていっている訳ですから、一瞬のうちに焼けただれて、川へ吹き飛ばされ、海の藻くずとして消えていったんだらうかと思っ

てみたり、沢山の死体と共に焼かれて土になっていったのだろうか。父の行方は全くわかりません。当時45歳の父でした。うちのおばあちゃんは、戦争が終わって2カ月ぐらいたってから、親戚の者達が我が家の焼け跡を整理に行った際に、真っ白いお骨となって現れたそうです。そのお骨を持って帰ってきて、ささやかなお別れをしたんですけど、本当に忘れられません。

あの頃逃げて行った人達は、治療も出来ないし、みんな、どんどん死んでいく話ばかりです。皆さん想像がつかないでしょうけど、沢山の人が日に何人も何十人も死んでいくんです。そんな中で、村の人、特に消防団のおじさん達が怪我をした人達のお世話をして下さいました。その直接原爆に関係のないおじさんやおばさんが突然に、わっと血を吐いたり、髪の毛がざっと抜けて、何人も死んでいける事件が起こるんです。あの時は、誰も想像だに出来ませんでした。広島市の7本の川から流された死体の多くは海に沈んで藻くずになっておられるのですが、波に乗って、あちこちの島や海岸に打ち上がる死体もいっぱいあったそうです。私がお話ししている地御前の海岸というのは遠浅で綺麗な海水浴場です。そこへ、日に何体も何体も死体が打ち上がるのを消防団のおじさん達が集めて、焼いたり埋めたり処置される大変な仕事だったようです。そのおじさん達が突然にばったばった何人も死んでいけるんです。あの時は、何とも言えない、何のことだかわかりませんでした。我々被爆者、そして流れてきた死体等についた目に見えない放射能のウランウムが相手に飛び散って起こった2次汚染の犠牲者だそうです。あの日、市民は四方八方に逃げていっててでしょう。逃げていった先でお世話になって、そこで関

係のないお世話をしてくれた人達が犠牲になったという記録が沢山残されているということも、あの原爆の2次汚染の犠牲者という、あの核の恐ろしさを本気で忘れないで下さいね。



あれからの広島は、本当に数年間、死の町のようになっていて、あっちにもこっちにも、死体を焼いた骨塚がいっぱいあったんです。3・4年経って、当時の市長の浜井信三という人が発起人になって、世界で唯一の被爆国として、我々がなめたあんな悲惨で残酷な人道上許すことの出来ない核兵器を使うような戦争という過ちを、二度と再び人間が繰り返してはならないということ、そして世界中がどうぞ永遠に平和であることを願って、ここ広島へ平和公園をつくることになるんです。まずは死体の整理ということで、各町内毎にお骨を集めて、平和公園の一角に供養塔として、地下に8万数千の人達のお骨が納められました。公園をつくるのに、何カ月もかかって、トラックで土を運んで運んで、埋めて埋めてつくったのが今日の平和公園なんです。あの供養塔のすぐ近くに1カ所だけくぼみのあるのを見つけて下さい。そこが昔の地面の高さで、慈仙寺という大きなお寺の墓地の一角が記念として残されています。大きな石の墓の上の部分が、爆風のために、ボンと1間ぐらい西に吹き飛んだのも、そのまま残してあります。あの地点は、原爆ドー

ムからちょうど 200 メーターの地点だそう  
です。本当に爆風の恐ろしさということを見  
届けて帰って下さい。

本当に一体あの戦争って何だったんだろ  
うかと、悔しい思いがします。勝った国も、負  
けた国も、沢山の人の命を奪うのが戦争です。  
そして、日本もあの戦争のために犠牲になっ  
た、数え切れぬ人達を踏み台にして、やっと  
手に入れたのが、今日のこの日本の平和なん  
です。どうか皆さん、二度とこの平和を壊す  
ようなことがあってはならないということ  
を、次の代を背負っていく皆さん方、今日の  
この出会いを忘れないで下さい。そして皆さ  
んが大人になられて、いずれまたお子さんが  
出来たり、お孫ちゃんが出来たりする時代が  
来る訳ですけど、後の世の人々が本当に平  
和に生きていくためには、どうあればいいん  
だろう。核兵器の問題も決して無関心ではい  
けないということ、この広島を、私  
どものこの平和への思いを、本当にお願いで  
すから、どうか受け取めて帰って下さいね。

5・6年前のあの東北の大震災の津波の映  
像をみんな覚えてるよね。あの自然の大災害  
は人間の手で止められませんか。一方、戦争  
の問題、核の問題というのは、人間がしでか  
すこと。どうか、そういう意味で、1 人の人  
間として、いかに生きていくべきかというこ  
とに関心を持って、いつまでも、皆さん方、  
しっかり支える人になって下さいね。

私がこういうふうに私自身の体験をお話し  
するような気持ちになったのは、今から十数  
年前です。ということは、戦争が終わって、  
もう既に 50 年以上も経っていました。もう  
あんな話はしたくない。思い出したくもない。  
本当に辛いことでしたけれどね。実は戦後、  
「空白の 10 年」といって、原爆の後、主人  
が公務員ということもあって、原爆のことな

ど一切言うてはならない時代があったんで  
す。私共もあの戦後の厳しい時代に、我が家  
も何とか生き延びて、1 人の娘が出来、その  
後結婚して、2 人の孫が出来ました。その孫  
達が、何不自由の無いこの時代、皆さんもそ  
うですけども、食べるものも着るものも、何  
も困るものが無い。ありがたいと思う反面、  
食事への不平を言ったり、学用品を粗末にし  
たりするその姿を見て、時折孫達に、「戦  
時中は本当に何もなかったんだよ。物を大切  
にしてちょうだい。食べるものも着るものも  
なかったんだよ。あんまり不平言うんじゃな  
い。捨てるんじゃない。最後まで感謝してい  
ただこうね」と、つついおばあちゃんとし  
て孫達に注意しながら育てました。ある日の  
こと、私が何か見かねて思わず、「本当にい  
いかげんにしなさいよ。大事に、もうそんな、  
いけませんよ」とか、注意したんでしょうね。  
そうしたらね、本当に真剣な顔で、じっと見  
て、「おばあちゃん、だったら、どうして昔  
の人は戦争なんかしたの」「戦争をしてはい  
けんと何で言わなかったのか」と言ったんで  
す、私はあの時、すぐに何故子どもが納得出  
来るような返事が出来なかったんだと、今で  
も悔やむんですが、あれ以来、一問一答を重  
ねる人間になってくるんです。

あれからの私は、沢山の犠牲者の中から、  
今日までこうして、くしくも生かされてるん  
だという、命への責任を果たさなければいけ  
ないんじゃないかな、思い出すことも辛いし  
言いたくない。でも、ありのままを伝えるこ  
とによって、皆さん方がそれぞれに考えて下  
さって、将来の日本のために、世界のために、  
どう立ち向かっていくかということを考えら  
れる人になってもらいたいという祈りを込め  
て、辛いけども、そこを乗り越えて、お話し  
をさせてもらっています。

以前学生さんから「柳川さんはアメリカを憎みますか」という質問があったんです。今までそんな質問を受けたことないので、「え。どうしよう」と思った時に、ふっと思い出したことは、実は私の先代の身内が大正時代から貿易商だったので、父方、母方のおじさん、おばさんにハワイへ行って人達がいるんです。父方の従兄弟は、日本で中学校の教育を受けて、アメリカに帰り、戦争が始まって、アメリカの兵隊になりました。母方の従兄弟は、向こうのハイスクールから、日本の東京の大学に入って、その後、学徒出陣で日本の兵隊になっているんです。身内が心ならずもアメリカの兵隊と日本の兵隊になってしまいました。戦争というものは、それ位、非常なものです。だから「アメリカを憎むか」と言われて、本当に複雑なのです。「アメリカを憎むんじゃない。私は戦争を憎む」という気持ちです。

私も残された時間もわずかとなりましたけれど、こうして1人でも多くの方に、こういう熱心に聞き届けて下さる皆さん方に、あの日のありのままをお伝えしたいと思って、今日も来たんです。本当に熱心に聞いていただいて、ありがとうございました。

平成 29 年 8 月 5 日 (土)  
YMCA 国際文化センター

#### 《被爆者講師プロフィール》



【氏名】 やながわ よしこ 柳川 良子

【被爆時年齢】 16 歳

【被爆時の状況】

1945 (昭和 20 年) 年春、広島女子高等師範学校の新設に伴い、学校の事務を手伝うように命じられ、横川の自宅から千田町の本校に通っていた。

8 月 6 日、学校で朝礼を終えて教務室に入って間もなく、ピカッ!! と鋭い閃光と同時に目の前の二階建て校舎が轟音と共に飛び散るのを見た。暫く意識を失っていたが、周囲の悲鳴で我に返り、先生の励ましの声に勇気づけられて、押しつぶされた校舎の屋根の上に這い上がった。右鎖骨が折れ、指が裂け、顔から首にかけてガラスが刺さり、頬が破れて垂れ下がっていたので、びっくりした。学校への延焼も迫っていたので、数名で市役所前→基町→三篠橋と北へ向かった。我が家は焼失していたが、負傷した兄と再会でき、最後の避難先に決めていた地御前の祖母の家に向かった。

7 日後、地御前に着き、母、弟と対面。しかし、父は未だに行方不明。



1、材木町跡碑



2、被爆したアオギリ



3、ローマ法王平和アピール碑  
(資料館東館内)



4、マルセル・ジュノー博士記念碑



5、広島市立高女原爆慰霊碑



6、平和の門



7、原爆犠牲国民学校教師と子どもの碑



8、広島市商・造船工業学校慰霊碑



9、広島二中原爆慰霊碑



10、義勇隊の碑



11、被爆した墓石 (慈仙寺跡の墓石)



12、韓国人原爆犠牲者慰霊碑



13、原爆供養塔

## 6. 成果報告

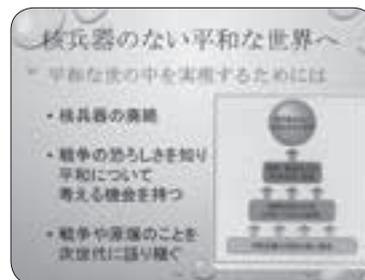
各中学校を代表して参加した15名の派遣生は、広島で学んだこと、感じたことを各学校・地域に伝えるため、下記のとおり報告会や発表を行いました。

東海中学校 松村 京佳

【日時・場所】平成30年2月19日 体育館

【方法・対象】学習成果発表会 全校生徒（333人）・保護者・小学校の先生・地域の方々

- 【発表の内容】
- ①原爆被害の具体的な内容について
  - ②被爆者、柳川さんの講話について
  - ③原爆ドーム、平和記念資料館の見学、平和記念式典への参加について
  - ④資料館にある「地球平和監視時計」について
  - ⑤未来の平和のために、「してほしいこと」「私が思うこと」について



大崎中学校 工藤 真奈実

【日時・場所】平成29年10月28日 体育館

【方法・対象】学習報告会 全校生徒・保護者（約350人）

- 【発表の内容】
- ①広島派遣、原爆投下について
  - ②平和記念式典で感じたこと
  - ③被爆者講話で感じたこと
  - ④原爆投下による被害
  - ⑤オバマ前大統領の広島訪問を踏まえて
  - ⑥これからの私達、後に続く者としてしなければならないこと





富士見台中学校 林 華子

【日時・場所】平成 29 年 10 月 20 日 体育館

【方法・対象】文化祭での報告会 全生徒・保護者・地域の方等約 500 名

【発表の内容】①平和記念式典に参加して ②被爆者講話・体験談 自分が思ったこと  
③灯ろう流しについて ④今回の体験を通して考えること

#### 〈発表原稿抜粋〉

未来を生きる私たちが歴史を繋ぐ努力をすることでできっと平和は繋がっていきます。日頃から命を大切にすること、皆がそれぞれを優しく思いやって暮らしていくことも平和への第一歩なのだと思います。誰もが明日を幸せに生きていけるように、平和な日常を守り続けていきましょう。



荏原第一中学校 定村 拓実

【日時・場所】平成 29 年 12 月 4 日 体育館

【方法・対象】報告会 全校生徒 518 人

【発表の内容】「原爆の恐ろしさ」と「命の大切さ」について説明。具体的に、「原爆の恐ろしさ」では、まず原爆の威力が強い訳を易しい言葉で伝えた。そして、派遣中に撮った被爆した人や物の写真とともに、なぜこうなったのか等を説明した。次に「命の大切さ」では、まず被爆者の柳川さんの話を私自身の言葉で易しく伝えた。そして、柳川さんの話から私自身が感じたことを述べた。最後に「あなたはどうしたらこの平和を保てると思いますか？また、その為にあなたは何を出来ますか？」と投げかけた。

#### 広島平和使節派遣の報告

1. 原爆の恐ろしさ
2. 命の大切さ

原子爆弾とは、ウラン・プルトニウムなどの元素の原子核が起こす核分裂反応を利用した核爆弾です。また、この爆弾は多大なエネルギーを携えている

※原子力自体は悪くありません。それを爆弾に使おうとする考えが悪いのです。実際に原子力を使ったエンジンを使って大規模空襲へ行こうというプロジェクトもあり、現実性はかなり高いです。



今ある平和を守るためにあなたは  
何を出来ますか

荏原第五中学校 青柳 咲希

【日時・場所】平成 29 年 11 月 3 日 体育館

【方法・対象】若葉祭（文化祭）の舞台発表の中での報告

全生徒・保護者・地域の方等 約 500 名

〈発表原稿抜粋〉

私は「どうして今の平和な日本があるのか」「これからも平和を維持するために何ができるのか」ということを考えさせられる貴重な体験をすることができました。私は平和とは争いがなく、みんなが平等に暮らしていることだと思います。でも、争いというものは、世界中の人たちが平和についてもっと考えなければ、なくなることはないです。そのためには、自分の意見だけを主張するのではなく、他の人たちの意見もしっかりと受け入れ、互いに認め合っていくことが必要だと感じました。

広島平和派遣に参加して



平和とは何か。  
私たちに、  
何ができるだろう。

戦争の悲惨さ、  
平和の大切さを、  
伝えていきたい。



荏原第六中学校 境野 杏菜

【日時・場所】平成 29 年 10 月 28 日 体育館

【方法・対象】学習成果発表会

全校生徒・教員・保護者

【発表の内容】①被爆者講話（原爆による被害）②原爆ドーム ③平和記念式典 ④平和記念資料館（破れかけた服、キノコ雲、焦げた弁当箱、止まったままの時計）⑤石碑めぐり ⑥当時の人々の暮らし ⑦平和使節派遣を通して考えたこと

原爆犠牲国民学校  
教師と子供の碑  
(原爆は許してはいけない決意を示す像)



原爆供養塔  
(引き取り手のない遺骨を供養)



★平和使節派遣を通して考えたこと★

- ・当たり前ではないことが当たり前できていることに感謝し今を大切に生きる
- ・戦争の恐ろしさや今、問題となっているニュースを知り、関心をもつ
- ・武器や核兵器に頼らず、話し合いを重ね誰かが意見を尊重する

→ この出来事を次の世代に伝えていく

戸越台中学校 西沢 美槻

【日時・場所】平成 29 年 10 月 21 日 体育館

【方法・対象】学習成果発表会 全校生徒約 320 人、保護者 50 人

【発表の内容】①被爆者講話 原爆による被害 ②原爆ドーム ③平和記念式典  
④平和記念資料館（破れかけた服、キノコ雲、焦げた弁当箱、止まったままの時計）  
⑤石碑めぐり ⑥当時の人々の暮らし  
⑦平和使節派遣を通して考えたこと

参加目的  
不安定な世界情勢  
⇒ 原爆投下時の状況を  
知ることで・・・  
⇒ 平和への理解を深めたい

・ 柳川さんの心情  
★「アメリカではなく、  
戦争を憎んでいます。」  
⇒ 被爆者独特の意見  
戦争への強い思いを伝達

★「たくさんの犠牲になった  
人達を語り台にして、  
今日の平和があります。」  
⇒ 伝えていかねばならない  
言葉だと思った

日野学園 鈴木 杏梨

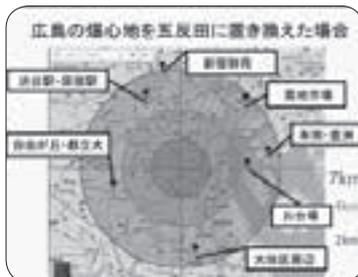
【日時・場所】平成 29 年 10 月 28 日 体育館

【方法・対象】報告会 生徒 5～9 年生 622 人

【発表の内容】①今回の広島派遣の活動について  
②原爆が落とされた日（被爆後 4 ヶ月で 14 万人もの人が命を落とした。）  
③広島に投下された原子爆弾と現代の最新の原子爆弾を比較  
④まとめ：広島派遣を通して私が思ったこと。

〈発表原稿抜粋〉

先人たちの努力によって今の私達の平和で豊かな生活がある。水も食べ物も好きなだけ食べることができ、自由に教育が受けられる。このことを当たり前にはいけない。先人たちが積み上げ、築きあげた平和な日本を次の世代、またその次の世代へと受け継いでいけるよう、現代に生きる自分たちの役割をしっかりと考え行動するべきである。



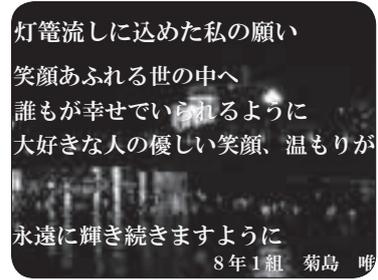
伊藤学園 菊島 唯

【日時・場所】平成 29 年 10 月 27 日 アリーナ

【方法・対象】報告会（学芸発表会） 生徒 5～9 年生・保護者約 600 人

【発表の内容】 ①視聴覚教材（パワーポイント）を使用し、被爆者講話や平和記念式典への参列、平和記念資料館などの見学など、今回の派遣を通し学んできた内容について報告をした。

②今回の派遣を通し感じた、「今の日常にある幸せ」について報告した。



八潮学園 山口 紗楽

【日時・場所】平成 29 年 10 月 28 日 体育館

【方法・対象】報告会 児童生徒・先生・保護者・地域の方 約 900 人

〈発表原稿抜粋〉

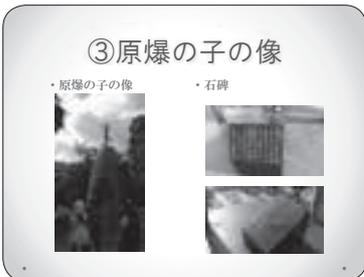
皆さんは、今から 72 年前の 8 月 6 日、広島に何があったか知っていますか？

おそらくほとんどの人が原爆投下について思い浮かべたのではないのでしょうか。

今幸せな時代に生きる私達だからこそ、その幸せは幾千もの尊い命を踏み台にしたものだという事を忘れずに、また、それを後世に伝えていかなければなりません。

もうすぐこの戦争を体験した人はいなくなってしまうでしょう。しかし、この日本の歴史を風化させることなく後世に伝えていくことが、日本国民である私達の義務なのです。これを機に、皆さんが戦争に対しての興味を持ってくれればと思います。

少しずつでも平和な世界を創っていきましょう。



荏原平塚学園 飯島 伸治

【日時・場所】平成 29 年 10 月 27 日 アリーナ

【方法・対象】学習成果発表会 児童・生徒・保護者

【発表の内容】①広島駅にて ②平和記念公園にて  
③灯籠流し ④原爆ドーム  
⑤被爆者講話 ⑥品川駅にて  
⑦碑めぐり講話にて  
⑧亡くなられた方に花束を捧げる



碑めぐり講話にて



亡くなられた方に花束を捧げる

品川学園 増田 なすな

【日時・場所】平成 29 年 11 月 3 日 体育館

【方法・対象】報告会 生徒約 500 人

〈発表原稿抜粋〉

式典の平和の誓いとして読み上げられた文章の中で、「(原爆が落とされた後) あのまま、人々があきらめてしまっていたら、(略) 苦しい中、必死で生きようとした人がいなければ、今の広島はありません」と述べられていた箇所に、私は強く胸を打たれました。この言葉は一生忘れないと思います。

私は今回、広島に行くまでは、平和についてあまり深く考えたことがなかったように思います。しかし、この平和使節としての体験を通じて、今、自分が安全な場所で穏やかに暮らしていることがどれだけありがたい事なのかという事実にあらためて気が付かされました。今、私ができることは、この事実を友人や周りの人に伝えていくことです。少しでも平和に対する関心を持ってもらうために、これからもこの思いについて積極的に広めていきたいと思っています。



豊葉の杜学園 堤 紗菜

【日時・場所】平成 29 年 10 月 30 日 アリーナ

【方法・対象】学習成果発表会 生徒 5～9 年生・保護者・地域関係者 約 600 名

〈発表原稿抜粋〉

私が考える平和とは争いごともなく、世界皆が笑って生きていくことだと思います。戦争や原爆のことについて、知らない人は沢山いると思います。でも 1 度でいいから、戦争や原爆のことについて考えてほしいです。今生活出来ていることを当たり前とは思わないでほしいです。平和な日本、世界にしていくには、戦争や原爆のことを多くの人に伝えていかなければいけないと考えます。



〈8月6日(2日目)「灯ろう流し」灯ろうに書いた派遣生のメッセージ〉

